

鋸齒尖頭器・石鋸の系譜と展開

久我谷 溪太

要旨

本稿は、鋸齒尖頭器・石鋸の系譜と展開の分析をもとに、縄文時代の九州西北部沿岸地域から新石器時代の朝鮮半島にかけて成立していたとされる「漁撈文化」「漁撈文化圏」の再検討を試みたものである。はじめに基礎作業として資料の集成を行い、その結果から両者を一体的に捉えた4つの類型を提示し、類型ごとの年代や分布状況を整理した。従来の研究ではこれらの系譜を朝鮮半島や大陸方面に求める見解があったが、分析の結果から唐津湾沿岸地域において凹基形鋸齒鏃を構造的な特徴を維持しつつ大型化させたことにより、出現したものである可能性を指摘した。破損率の高い脚部を別造りにして交換を容易にすることにより、運用効率を向上させる狙いがあったと想定される。このことから、鋸齒尖頭器を伴わず少数の石鋸のみが確認される遺跡が多数存在するという現象を備蓄分や廃棄品が残置された結果であると解釈し、朝鮮半島の遺跡で石鋸が確認されるのも、九州から限定的・断続的に持ち込まれたものが同様の理由によって当地に残されたことによると捉えた。「漁撈文化（圏）」を構成したとされる他の遺物についても、近年の研究では朝鮮半島との関係性の強さを疑問視する見方が相次いでいるうえ、相互の時間的・地理的な連動性も明確ではないといえる。以上のことから、漁撈具から推察される当時の日韓交流には文化的な共通性・一体性を認めるほどの密な関係は見出せず、総体的な枠組としての「漁撈文化（圏）」の存在自体も認め難いと結論される。

1. はじめに

日本列島の縄文文化と朝鮮半島の新石器文化との交流をめぐる研究は、土器をはじめ、石器・骨角器のほか、貝輪・貝面などの精神的遺物も含め、現在に至るまで膨大な研究の蓄積が得られてきた。なかでも中心的な課題となったのは、曾畑式土器の起源論に代表されるような土器の影響関係をめぐる議論や、外洋性の漁撈具の展開から推察される交流の主体者やそのシステムをめぐる問題などであった。

外洋性の漁撈具をめぐる問題において特に注目された資料として、“西北九州型結合式釣針”がある。その名のとおり九州西北部沿岸を中心に認められる大型の結合式釣針で、弥生時代にも引き続いて用いられたとされている。朝鮮半島新石器時代の結合式釣針の系譜を引くものとしてこれを捉えた渡辺誠は、当時の日韓交流は外洋での操業により必然的に生じた、両地域の漁撈民間での交流関係がその基盤にあるとした。そしてこの交流関係は弥生時代にも受け継がれ、水田稲作が日本列島にもたらされる道筋となったと指摘した（渡辺 1985）。この渡辺による見解を受けて、縄文時代の九州西北部沿岸から新石器時代の朝鮮半島南部沿岸を中心とする地域に「漁撈文化」「漁撈文化圏」を設定する動きが相次ぎ、この枠組みを基盤により詳

細に交流の実態に迫ろうとする論考が数多く著されることとなった。

本稿の分析対象である鋸齒尖頭器・石鋸もまた、両地域間での漁撈民の交流を証する遺物として、西北九州型結合式釣針と並んで評価されてきた資料である。“鋸齒尖頭器”とは刃部に鋸齒が施された大型の打製石鏃形の製品で、薄く板状に剥いだ小型の素材の片刃に鋸齒を施した打製石器である“石鋸”と組み合せて、刺突漁具として用いられていたと考えられている。両者を総称して「組合せ式石鋸」などとよぶこともある（水ノ江 2012）。出土する地域や時期などに西北九州型結合式釣針との連動性があるとされ、「漁撈文化（圏）」を構成する主たる要素のひとつとして重要視されてきた。

しかし近年、従来までのこのような見方にゆらぎが生じはじめている。すなわち、両文化間での交流の存在は認めつつも、それに伴う文化的影響の所産とされてきた種々の遺物への評価を再検討して、交流の実態や影響関係のあり方を新たに捉え直そうとする動きの高まりである（水ノ江 2003；水ノ江・西脇編 2013 など）。西北九州型結合式釣針を例とすれば、九州と朝鮮半島とでは中心時期や結合方法が異なることから交流の頻度を高くは見積もれないとする指摘や（中尾 2013）、日本列島の東北・北陸地方の結合式釣針との

系譜関係に注意すべきとする見解が出されている（水ノ江 2015）。土器研究においても、渡海経路上にある玄界灘島嶼部では三万田式段階に交流の断絶が認められるなど（古澤 2014）、水田稲作の開始と漁撈民間交流との関係に対する検証が進められている。

本稿では、このような近年の縄文文化と朝鮮半島新石器文化との交流関係を再考する動きを踏まえ、鋸齒尖頭器・石鋸を分析対象に据えて整理・分析し、両文化を縦断して展開していたとされる「漁撈文化（圏）」の実態について検討を試みる。

II. 研究史

1928年、杉山壽榮男は八重津輝勝から教示を得たものとして、「石鋸と稱す可き」打製石器を自身の著書のなかで写真・形態分類図とともに紹介し、東北地方で同様に“石鋸”と呼ばれている石器⁽¹⁾との形態的な相違を指摘した（杉山 1928）。この当時、石鋸は長崎県の五島列島のみで確認されていたようであり、当地域において特殊に発達した石器であるとの見方もあった（田淵 1931）。

このころすでに朝鮮半島東北部では、石鋸と同様に片方の刃部に鋸齒が施された細長い板状の石器が確認されており【図 20-1】、柄に植刃して鎌として用いたものと推測されていた。そのさなか、朝鮮半島南東部沿岸に位置する東三洞貝塚の発掘調査でも、杉山が紹介した石鋸と類似した石器が出土し【図 21-8】、その位置づけが問題となった。横山將三郎は朝鮮半島東北部の“石鋸”と東三洞貝塚の石鋸とは形態が異なるとして別種のものとし、むしろ五島列島の石鋸との類似を指摘した（横山 1933）。及川民次郎も、出土した隆起文土器に縄文土器からの影響が認められることを引き合いに、東三洞貝塚の石鋸は九州から持ち込まれたものであると推測した（及川 1933）。

戦前から五島列島に渡って発掘調査を行っていた桑山龍進は、戦後になって当地の石鋸を主題とした研究発表を行った（桑山 1951）。ここで桑山は石鋸の用途を「物をヒキ割る時に用いたもの」とし、使用方法についても「数个接続し、嵌入或は挿入」して用いたものと想定した。

この桑山の見解に着目して、日本列島における農耕の起源をめぐる問題と結びつけたのが芹沢長介である。新石器時代の西アジアでは、木や骨の柄にはめ込んでムギの収穫具として鎌のように用いられていたとされる、sickle blade と呼ばれる石器が存在する。芹沢はこれと日本列島で確認されている石鋸は形態・着用方法が類似するとし、縄文時代に麦作を主体とした

農耕が存在していた可能性を示唆するものであるとした。そして横山が別種のものとした朝鮮半島東北部などで認められている類似品を、西アジアの sickle blade と日本列島の石鋸との間を繋ぐものとして位置づけた（芹沢 1965）。同様の見解はシンポジウム「日本農耕文化の起源」でも披露され（芹沢 1968）、有光教一が製粉具である磨穀石との朝鮮半島での共伴例などについてコメントしている（有光 1968）。

芹沢が縄文農耕論を展開させていた 1960年代には、すでに五島列島以外の九州の沿岸部の遺跡でも石鋸が確認されていた。深堀遺跡もそのひとつであるが、ここではある特徴的な石器が出土していた。それが大型の鎌形で両刃部に鋸齒と 2カ所の抉りが施された石器である【図 7-4】。報告者はこれを「石鋸を背合わせに 2個並べ、先端にサメ歯鎌を組み合わせた」状態を一個体の石器のなかで表現したものとして捉え、その用途を鋸であるとした（内藤編 1967）。裏返して言えば、石鋸は石鎌と組み合わせることで成立する刺突漁具である可能性がここで示されたのである。縄文農耕論に懐疑的であった佐原真は、この説を取り上げて石鋸を鎌とする認識に対して批判的な見解を示し（佐原 1968）、次第に石鋸を農耕具とする見方は支持を失っていった。

1974年には、天神山貝塚からも鋸齒を持つ大型の鎌形の石器が石鋸とともに出土した。ただし深堀遺跡出土のものとは異なり、石鎌部分と石鋸部分とを画すかのような抉りがないものであった【図 3-1】（前川編 1974）。報告者である前川威洋は、これ以前に乙益重隆とともにこの種の石器と石鋸とが組合って用いられた可能性を指摘しており（乙益・前川 1969）、発掘調査によってこの見方を裏付けることとなった。横山順・田中良之もこの見解を肯定するとともに、石鎌（鋸齒鎌）を先端に据えた場合には柄が細くなるため石鋸の装着が難しくなるとして、鋸齒鎌と石鋸との組み合わせ関係を否定した（横山・田中 1979）。のちにこのような刃部に鋸齒が施された大型の鎌形の石器は「鋸齒先頭器」と命名され（山崎 1988）、本稿でもこの名称を用いている。

深堀遺跡の発掘調査の報告者のひとりであった橘昌信は、九州の縄文時代の遺跡で確認されている石製の刺突漁具を「石鋸」の名称で一括して集成・考察を行った。ここでの分析を通して、石鋸による刺突漁は縄文時代の九州西北部における主要な漁撈形態のひとつとして位置づけられることとなる。同時に橘は、他の漁撈関係遺物の状況も総合させて、「対馬暖流に棲息する大型魚類および海棲哺乳類を対象とした」「刺

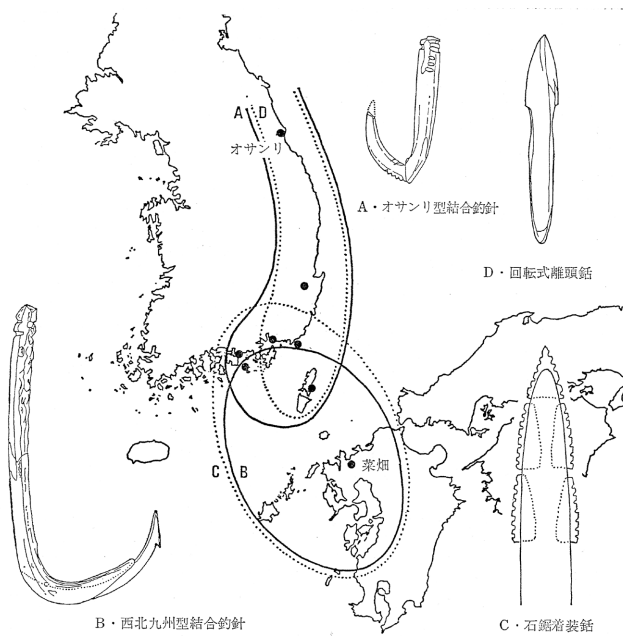


図1 渡辺誠「朝鮮海峡における漁具の分布」

突漁業と「釣漁業を基盤とする漁撈活動」をその内容とする「対馬暖流型漁撈文化」を提唱する。そしてこの「文化」が、九州西北部沿岸から朝鮮半島南部沿岸にかけての地域に展開していたとする枠組みを提示した(橘 1979)。

ところで橘が提唱したこの「対馬暖流型漁撈文化」は、石鉞などによる刺突漁に加え、釣漁業もその中心的な要素とされている。これは西北九州型結合釣針のことを主として指しており、当時すでに渡辺誠によって朝鮮半島との関係性が指摘されていた(渡辺 1968)。このとき渡辺は、西北九州型結合釣針と分布が重なる資料として鋸歯尖頭器・石鋸についても言及しており、その系譜についても同様に日本列島外に求めている点は注意が必要である【図1】。すなわち、用途こそ鉞として認識しながらも、系統関係については芹沢と見解を同じくしたのである。そのうえでこれらの漁撈具が日本列島にも及んだ理由を、外洋における漁業の展開により必然的に生じた両地域の漁撈民間での交流に求めたのである。そして、このような漁撈民間の交流こそが当時の日韓交流の基盤であったと評価するとともに、弥生時代に水田稲作が日本列島にもたらされる道筋ともなったとする見通しを示したのであった(渡辺 1985)。

甲元真之もまた、これらの漁撈具の系統関係について渡辺と認識を同じくする(甲元 1987)。そして、これらが認められる地域には単一の漁撈集団により形成された「漁民ネットワーク」が成立していたとする

とともに、朝鮮半島側にも同様なネットワークがあり、双方の接触を通して交流が行われていたと想定した(甲元 1990)。一方で山崎純男は、これらの漁撈具と朝鮮半島南部沿岸との関係性こそ認めるものの、朝鮮半島北部の石鋸類似品については、地理的な条件や形態的な相違から使用目的や機能を異にするものとみた(山崎 1988)。

いずれにせよ、鋸歯尖頭器・石鋸をはじめとする縄文時代の九州西北部沿岸を中心に特徴的に認められる漁撈具は、これらを用いていた漁撈民が朝鮮半島との関係を有していた物証のひとつとして認識されることとなり、当時の日韓交流は彼らの活動を基盤に展開していたとする見方は多くの支持を集めることとなった(坂田 1988、宮本 1990 など)。それとともに、橘の「対馬暖流型漁撈文化」や甲元の「漁民ネットワーク」の枠組みをより発展させて、「環対馬海峡文化圏」(木村 1987)・「環玄界灘漁撈文化圏」(山崎 1995) などといった独自の定義によって捉えようとする動きも活発化した。

鋸歯尖頭器・石鋸とその他のいわゆる“石鉞”との性格差が指摘されるようになるのも、このころからである。山崎純男は、両者には時期や形態・石材・分布などに違いが認められるとし、その要因を対象とする動物種の相違に求めた(山崎 1988)。田島龍太は、鋸歯尖頭器・石鋸が石鉞と比べて出土数が少なく、重量・製作技術にも差が大きいことを指摘し(田島 1995)、刃部の加工も精巧である点から儀器的な性格を持つ可能性を示した(田島 1996)。福田一志は、土器型式の段階ごとに鋸歯尖頭器・石鋸の動向を整理したうえで、南福寺式・坂の下式期に石鉞からの交替を想定した。また鐘崎式・北久根山式期には個々の遺跡での石鋸の出土数が1～2点程度に減少するとし、その背景に実用品から象徴物への性格の変容があった可能性を指摘した(福田 1999)。近年では川道寛が、鋸歯尖頭器・石鋸を「粗製」と「精製」とに分類し、「精製」の製品には使用に際して意義のないほどに精緻な鋸歯加工が施されているとして、儀器的な側面も想定しようと述べている(川道 2013)。

2003年、水ノ江和同は縄文文化と朝鮮半島新石器文化との交流をめぐる従来までの研究に対し、重要な問題を提起した。これまで影響関係が見出されるとされてきた土器や結合式釣針を両文化間で相対的に比較すると、施文や加工の技術が一方の文化内では視覚的な情報だけに留まっていることとする指摘である(水ノ江 2003)。さらに水ノ江は、漁撈文化(圏)の要素とされてきた種々の遺物にも同様な状況を認めたい

表1 鋸齒尖頭器・石鋸 出土・採集遺跡一覧表

県	市町村	遺跡		種別	類型／個数						共伴土器	文献	
		No.	遺跡名		徳蔵	下谷	深堀	門前	他	不明			
福岡県	芦屋町	1	山鹿貝塚	鋸					2		採集	中村 1971	
		糸島市	2	天神山貝塚	尖 鋸	1 1						中津式・福田KⅡ式	前川編 1974
	3		岐志元村遺跡	鋸		1						北久根山式・御領式～黒川式	宮本編 2000
	4	新町遺跡	鋸	4	1						中津式・福田KⅡ式・南福寺式・鐘崎式・北久根山式	河村編 1992	
佐賀県	唐津市	5	西唐津海底遺跡	鋸		1					採集	松岡・森 1982	
		6	徳蔵谷遺跡	尖	6						曾畑式・船元式・里木式・並木式・阿高式・坂の下式・中津式・福田KⅡ式・御手洗A式・御手洗C式・北久根山式・黒川式(SX611:坂の下式・中津式)	田島編 1994;1995;1996 岩尾編 2003;2004	
				鋸	28	6			3	2			
		7	大友遺跡	鋸						1		弥生早期～後期	藤田・中川編 1981
8	赤松海岸遺跡	尖		1						塞ノ神式・轟式・曾畑式・羽島下層式・彦崎ZⅠ式・並木式・阿高式・坂の下Ⅰ式・御手洗A式・鐘崎式・西平式・三万田式(鋸齒尖頭器は採集)	荻原・久原 1975 明瀬編 1989		
		鋸		4									
長崎県	対馬市	9	志多留貝塚	鋸		1				1	鐘崎式・北久根山式・宮下式・西平式(下谷型石鋸は採集)	坂田 1976	
		10	タカマツノダン遺跡	鋸		1					採集	渡邊 1954	
		11	佐賀貝塚	尖						6		鐘崎式・北久根山式	正林編 1989
				鋸	1					1			
	12	皇后崎遺跡	鋸					2			採集	増田 1963	
	13	松崎遺跡	鋸							1	田村式・条痕文・西之園式・轟B式・西唐津式・曾畑式・春日式・並木式・坂の下式・鐘崎式・北久根山式	田中編 2003	
			尖 鋸							1 2	轟B式・曾畑式・轟D式・船元式・並木式・阿高式系・中津式・鐘崎式・北久根山式・黒川式・山の寺式	安楽・藤田編 1985	
	15	三代遺跡	鋸		1						採集	村川編 1989	
	16	田川遺跡	鋸		1						坂の下Ⅰ・Ⅱ式	中田・高原編 1997	
	17	姫神社遺跡	鋸		1						採集	荻原・久原 1975	
	18	牟田遺跡	鋸		1						採集	荻原・久原 1975	
	19	池田下遺跡	鋸		1						採集	荻原・久原 1975	
	20	下谷遺跡	尖		1						並木式・坂の下式・御手洗C式・北久根山式・辛川Ⅱ式・三万田式	明石編 2002	
			鋸		1				1				
	21	つぐめのはな遺跡	尖							2		阿高式(徳蔵谷型石鋸は採集)	荻原・久原 1975 正林・村川編 1986
			鋸	1	1								
	22	里田原遺跡	尖			1					(縄文時代後期か)	正林編 1976	
	23	宮ノ首遺跡	鋸					1	1		並木Ⅱ式・阿高式系・鐘崎式	宮崎編 1991	
	24	殿崎遺跡	尖						1		並木式・阿高式・坂の下式・中津式・南福寺式・出水式・御手洗A式・鐘崎式・市来式・北久根山式・黒川式	福田編 1986	
			鋸	1	3			7	5	1			
	25	野首遺跡	尖		1					2	轟B式・西唐津式・曾畑式・轟C式・尾田式・船元Ⅱ式・春日式・中尾田式・並木式・阿高式・坂の下式・鐘崎Ⅱ式・北久根山式・西平式・三万田式・御領式・黒川式	塚原 2003	
			鋸		9			7	39	2			
	26	青方遺跡	鋸							1	採集	荻原・久原 1975	
	27	丸尾遺跡	鋸							2	採集	荻原・久原 1975	
	28	西の股遺跡	鋸		3				1		採集	荻原・久原 1975	
	29	上原遺跡	鋸		1				1		採集	荻原・久原 1975	
	30	浜泊遺跡	鋸					2			轟式・曾畑式・阿高式系	安楽・藤田 1979	
	31	頭ヶ島白浜遺跡	尖							1	曾畑式・尾田式・船元式・春日式・並木式・阿高式・坂の下式(その他石鋸1点は採集)	古門編 1996	
			鋸						3				
	32	福江・堂崎遺跡	鋸		1						轟B式・曾畑式・阿高式(・弥生時代以降の土器)	安楽編 1992	

県	市町村	遺跡		種別	類型／個数						共伴土器	文献		
		No.	遺跡名		徳蔵	下谷	深堀	門前	他	不明				
長崎県	五島市	33	白浜遺跡	尖						1	(その他石鋸1点：並木式・阿高式・) 鐘崎式・市来式・北久根山式	安楽編 1980 川口編 1994		
		34	中島遺跡	鋸	1	1		1	6	6	(下谷型石鋸：曾畑式・阿高式・出水式・) 鐘崎式・市来式・北久根山式・西平式・三万田式・黒川式	川道・塩塚 1997 村川編 1987		
		35	宮下貝塚	尖						1		(その他石鋸・鋸歯尖頭器：轟式・曾畑式・船元式・竹崎式・阿高式・) 富江式・鐘崎式・市来式・北久根山式・西平式	賀川編 1971 川道編 1998	
		36	女亀遺跡	鋸	1	1					2	採集	萩原・久原 1975	
		—	旧富江町内	鋸	1	17					2	採集	対馬遺跡調査会 19 東京国立博物館編 1979	
	佐世保市	37	宮の本遺跡	鋸							1	採集	久村編 1980	
		38	門前遺跡	尖				1				坂の下式	副島編 2006	
		—	旧鹿町町内	鋸	2							採集	芹沢 1968	
		39	岩下洞穴	鋸						3		(その他石鋸1点：爪型文・押型文・) 轟 A 式・轟 B 式・曾畑式・轟 C 式・轟 D 式・阿高式・後期以降の土器	麻生編 1969	
	西海市	40	ケイマンゴ-遺跡	鋸						1		黒川式	横山編 1980	
		41	雪浦清水遺跡	尖							1	轟 B 式・曾畑式・船元式・坂の下式・北久根山式・宮下式・西平式・太郎迫式・黒川式 (・近世陶磁器)	荒木編 2000	
	長崎市	42	出津遺跡	尖							1	曾畑式・阿高式・南福寺式・北久根山式・晩期以降の土器	平野編 1982	
		43	磨屋町遺跡	鋸		1						太郎迫式・黒川式 (・弥生時代以降の土器)	宮下編 2002	
		44	深堀遺跡	尖			2					鋸歯尖頭器・徳蔵谷型石鋸2点・下谷型石鋸1点：西平式／ほか轟 B 式・西唐津式・曾畑式・尾田式・鷹島式・船元式～阿高式・鐘崎式・北久根山式・太郎迫式・三万田式・黒川式	内藤編 1967 立石ほか編 2004	
	諫早市	45	有喜貝塚	尖							1	鋸歯尖頭器：阿高式・坂の下式・南福寺式・出水式・鐘崎式 石鋸：不明	秀島編 1984 諫早市美術・歴史館蔵	
		46	国崎遺跡	尖							1	表土層出土	小野・宮崎編 1989	
	雲仙市	47	魚洗川 B 遺跡	尖							1	縄文早期～晩期 (・弥生時代以降の土器)	大谷編 2008	
		48	大野原遺跡	尖							1	攪乱層出土	諫見編 2001	
	熊本県	熊本市	49	黒橋貝塚	尖				1			並木式・阿高式・中津式・南福寺式・出水式	高木・村崎編 1998	
			50	轟貝塚	鋸	1					1	押型文・塞ノ神式・轟 A 式・轟 B 式・轟 B 式・轟 D 式・並木式・阿高式・南福寺式・鐘崎式・北久根山式・西平式・御領式	藤本編 2008	
		天草市	51	大矢遺跡	尖			1	2	1			南福寺式 (下谷型石鋸4点は採集)	山崎 1972 山崎編 2007
			52	一尾貝塚	鋸							1	並木式・阿高式・南福寺式・出水式・鐘崎式・市来式・北久根山式	山崎編 2000
			53	沖ノ原貝塚	尖	1						1	轟 C 式・曾畑式・尾田式・船元式・並木式・阿高式・南福寺式・鐘崎式・御領式	山崎 2002
			54	椎ノ木崎遺跡	尖				1	3	2		曾畑式・轟 B 式・轟 D 式・阿高式・南福寺式・出水式・御手洗 A 式・鐘崎式・北久根山式・辛川式・西平式・太郎迫式・鳥井原式・御領式・黒川式	富田・松舟編 1989
55			浜ノ洲遺跡	尖	1							阿高式・南福寺式・出水式・鐘崎式	松本 2006	
—			天草市内	尖			1					採集	天草市本渡歴史民俗資料館蔵	
鹿兒島県		出水市	56	江内貝塚	鋸						1	羽島下層式・轟式・曾畑式・春日式・並木式・阿高式	長野編 1992	
			57	市来貝塚	尖			1				中津式・出水式・福田 K II 式・指宿式	新東・児玉編 1993	
	いちき串木野市 三島村	58	赤鼻崎	尖				1			採集	伊藤 2011		

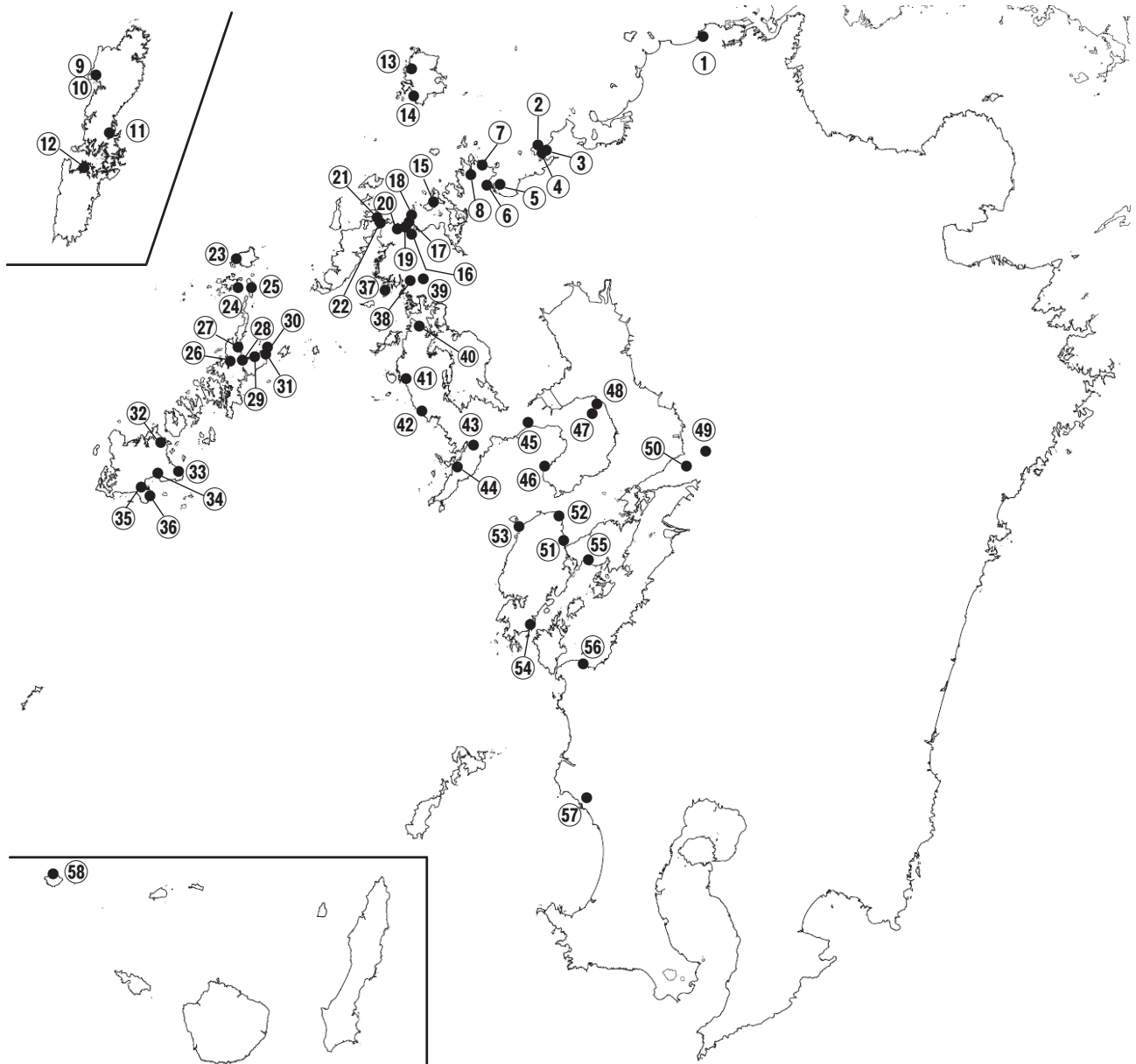


図2 鋸齒尖頭器・石鋸 出土・採集遺跡位置図

で、交流の基盤を両文化の漁撈民間での恒常的な接触に求めるこれまでの見解は、積極的に評価できるものではないとする立場を示した（水ノ江 2007）。同論文の中で水ノ江は石鋸についても言及しており、九州特有の剥離技法である鈴桶技法による剥片を素材としている点に縄文文化側の独自性を指摘している。水ノ江による問題提起以後、各種の資料を題材として新たに交流の実態を捉え直そうとする動きが現在に至るまで相次いでいる（水ノ江・西脇編 2013 など）。

Ⅲ. 分析対象資料の集成

分析をはじめるとに当たり、まずは鋸齒尖頭器・石鋸の基礎情報を整理したい。

鋸齒尖頭器・石鋸の集成は過去に何度か取り組まれているが、報告数そのものがまだ少ない頃のものであったり、地域を限定していたりするなど、現時点での全体的な状況を把握するには不十分なものも多い（荻原・久原 1975, 甲元 2001, 甲元ほか 2002, 芹沢 1965; 1968, 橘 1979, 山崎 1988, 渡辺 1968; 1985 など）。これに対し、2009年に行われた第19回九州縄文研究会長崎大会では、九州で確認されている縄文時代の漁撈具の網羅的な集成が行われ、出土状況等の情報も含めて整理された資料集が刊行されており、非常に有用である（九州縄文研究会長崎大会事務局編 2009）。本稿ではこれを参考として改めて原典の報告書等を確認するとともに、これに記載のないも

のも含めて、一覧表【表 1】のとおり整理した。ただしこの表で提示した資料は、報告書等で実測図・写真が明らかになっているものと、未報告ながら筆者が所蔵機関で確認したものに限っている。遺跡名や地名のみが報告されている例も複数あるが、形態や個数・共伴した土器等の情報が不明であるため、分析対象には含めていない。また、器種の誤認や誤表記の可能性が高いものも除外している。朝鮮半島で確認されているものについてはⅧ章で別途示した。

IV. 分類

鋸歯尖頭器の分類には、鋸歯および基部の形態と、刃部の挟りの有無を基準とした山崎純男によるものがある(山崎 1988)。川道寛は、鋸歯の加工の緻密度合を基準に粗製品と精製品とに分類している(川道 2013)。

石鋸では、杉山壽榮男による分類(杉山 1928)が現在に至るまで広く参照されてきた。このほかにも、報告書内や論文中でいくつかの分類案が示されている(桑山 1951, 田島編 1996, 津田 1940, 富田・松舟編 1989, 福田 1999, 山崎 1988 など)。しかし、全体的な形状と鋸歯の形態を基準としている点においては、いずれも杉山の分類と大きく変わるものではない。

これまでの鋸歯尖頭器と石鋸の分類は、このようにそれぞれ別々に取り組まれてきた経緯がある。両者が組み合って使用されたものであることが想定されているにもかかわらず、意外にも一体的に捉えた分類は行われてこなかったようである。そこで本稿では、両者の形態的な特徴の共通性や共伴関係に注意しつつ、新たな分類を試みたい。なお、遺跡名の直後の括弧内に表示した番号は、【表 1】および【図 2】で示した遺跡番号と対応している。

1. 徳蔵谷型

最初に着目したのは、“複歯”・“複式”などと呼ばれてきた特徴的な鋸歯をもつ一群である。直線に整えた刃部におよそ 5～10mm 間隔で U 字・V 字状に大きく深い剥離を施したのち、間に残った辺にさらに微細な剥離を 1 または 2 カ所加えるという、二段階の加工による鋸歯が施されているものである。この形態の鋸歯を刃部にもつ鋸歯尖頭器は、正三角形または二等辺三角形の全体形状を持ち、基部は直線である。刃部に挟りはなく、鋸歯の間隔は石鋸よりも広がる傾向がある。石鋸は、長さ 20mm 以上・幅 10mm 前後の長方形・台形にほぼ限定される。鋸歯尖頭器・石鋸とも管見の限りではすべて黒曜石製である。徳蔵谷遺跡(6)

の SX611 土壌で鋸歯尖頭器 1 点と石鋸 5 点が共伴した事例から(田島編 1996)、この一群を「徳蔵谷型」とする【図 3・4】。

2. 下谷型

徳蔵谷型との親縁性の高さが推測される一群として、徳蔵谷型の鋸歯加工の第一段階のみが施された資料が存在する。鋸歯は台形・略台形が連続したような形態となる。石材は黒曜石のほか安山岩・サヌカイトを用いるものもある。鋸歯尖頭器は徳蔵谷型と同様に挟りを有さない正三角形または二等辺三角形の全体形状をもつが、基部は凹型となる。石鋸も全体形状は徳蔵谷型とほぼ同様の傾向を示すが、比較して小型の製品も多い。側部と背部が一体化した半月形の製品も複数存在する。また石鋸にも鋸歯の間隔が 10mm 以上に広がるものが認められる。下谷遺跡(20)で石鋸と共伴した事例から「下谷型」と呼ぶこととする【図 5・6】。

3. 深堀型

徳蔵谷型の鋸歯尖頭器の持つ特徴とおおむね一致するものの、鋸歯には徳蔵谷型のような著しい規則性が認められない一群である。石材も安山岩を用いたものが存在する。深堀遺跡(44)で 2 点が出土した事例に代表させて、「深堀型」としておきたい【図 7】。

4. 門前型

装着に際して上方を向くと想定される側が先細り、下方側が広がる形状をした石鋸とこれに伴う鋸歯尖頭器の一群である。石鋸の全体形状は直角三角形様あるいは縦長台形様となる傾向がある。鋸歯には徳蔵谷型のような著しい規則性は認められない。全長には個体差があるが、全幅はおおむね 10mm 前後である。鋸歯尖頭器も石鋸と同様に規則性のある鋸歯は施されていない。両刃部の中央やや下に 1 か所の挟りが穿たれる。基部はいずれも凹形である。管見の限りでは石鋸はすべて黒曜石製であるが、鋸歯尖頭器には安山岩製・サヌカイト製のものもある。門前遺跡(38)で鋸歯尖頭器 1 点と石鋸 7 点が近接して出土した事例から「門前型」とする【図 8～10】。

5. その他

以上の 4 類型のほか、鋸歯尖頭器では細かな剥離によって不規則な鋸歯を造り出したものと、大きな剥離によって粗く鋸歯を造り出したものの、おおむね 2 形態を認めることができる。いずれも基部は凹型で、全

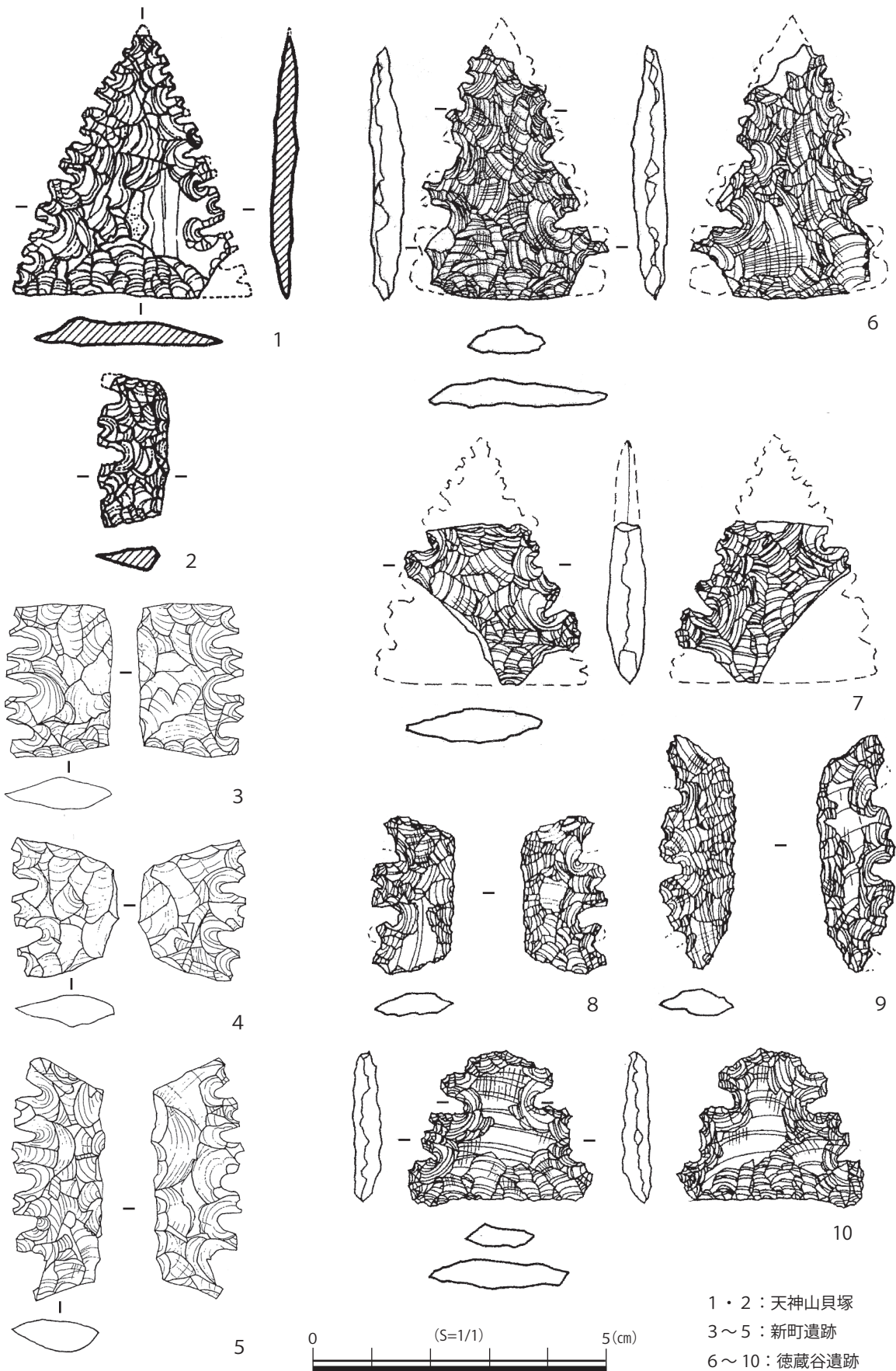


図3 徳蔵谷型①

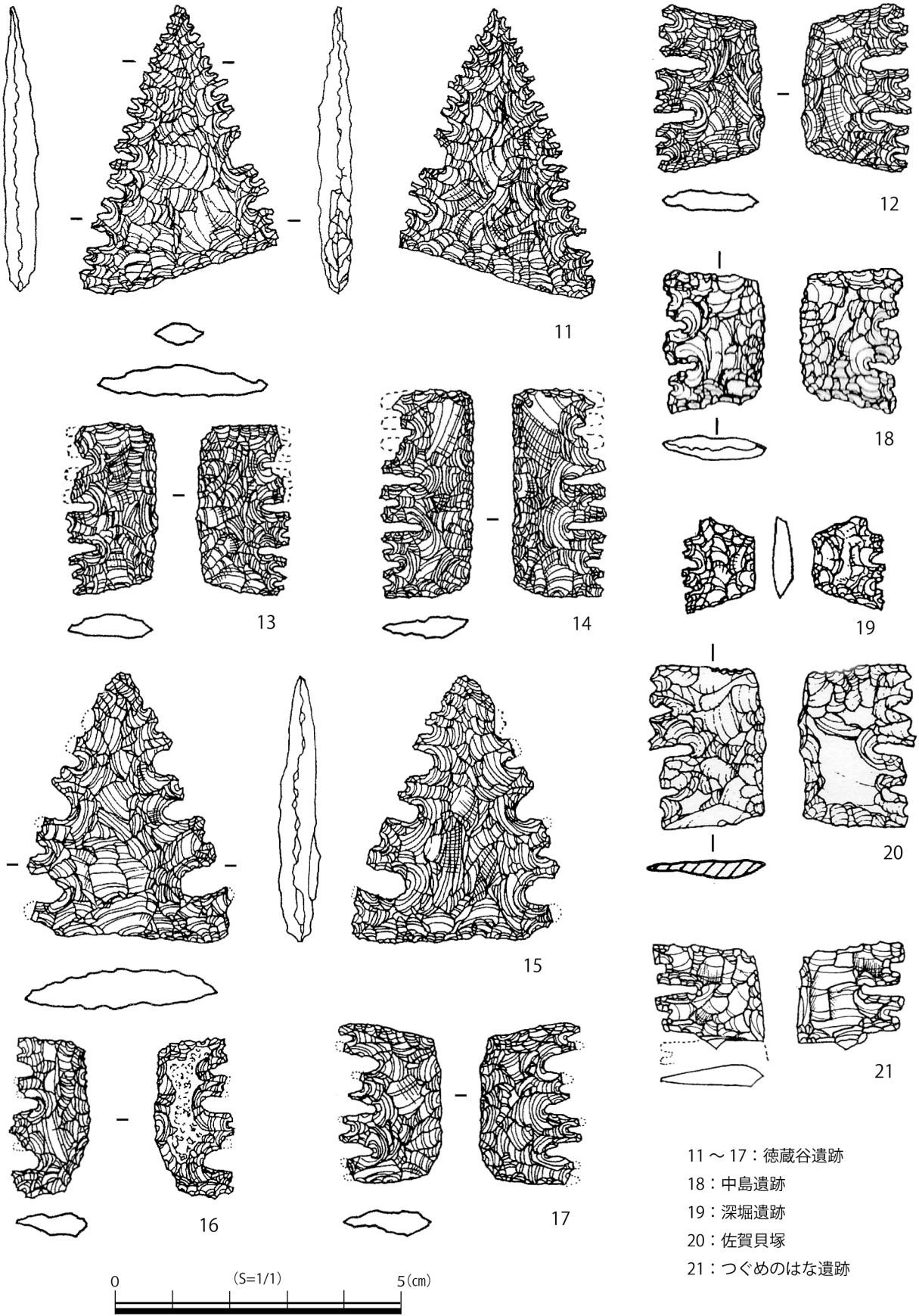
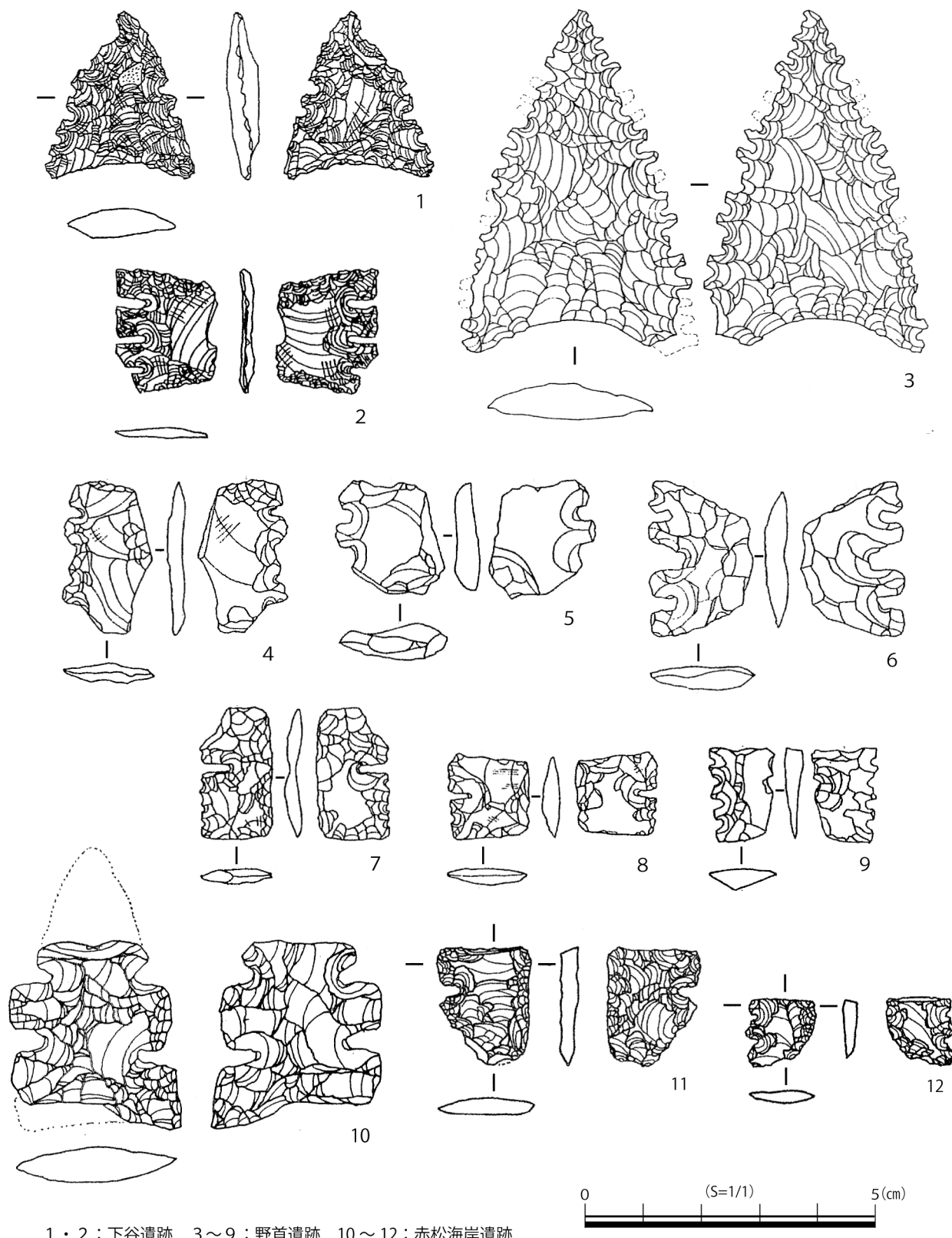
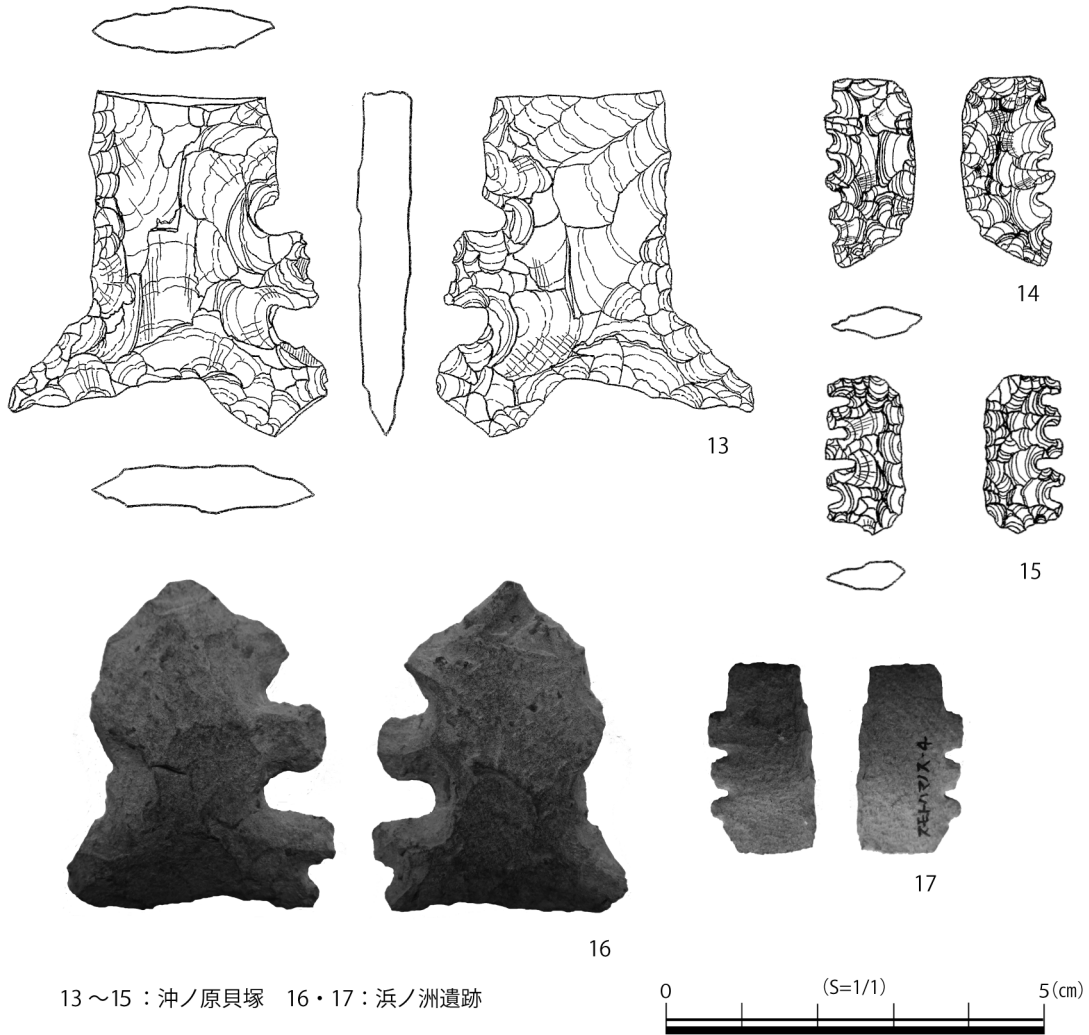


図4 徳蔵谷型②



1・2：下谷遺跡 3～9：野首遺跡 10～12：赤松海岸遺跡

図5 下谷型①



13～15：沖ノ原貝塚 16・17：浜ノ洲遺跡

図6 下谷型②

体形状は二等辺三角形のものが多い。石鋸は鋸歯に明瞭な規則性が認められず、全体形状も長方形・台形・半月形（曲線側が刃部となるものもある）・隅丸長方形・算盤珠形など多様である。これらの石鋸と鋸歯尖頭器との対応関係は明確ではなく、また特定の類型を抽出できるほどのまとまりは見出せない。これらの鋸歯尖頭器・石鋸は一覧表【表1】では「その他」として一括した【図11】。なお同表で「不明」としたものは、欠損部位が大きく分類不能であったものと、未製品として報告されているものである。

V. 年代の把握と整理

次に、前章で提示した類型を単位として、鋸歯尖頭器・石鋸が使用されていた年代を把握する。

鋸歯尖頭器・石鋸は、多時期にわたる複数の土器型式が混在した包含層中から出土することが多いため、年代の特定が難しいことが以前から問題とされてき

た。貯蔵穴や土坑から出土した例もごく少数あるが、やはり年代の特定には問題のある状況であることが多い。そのため、1型式あるいは連続・併行する2あるいは3型式の土器が伴う包含層や遺構からの数少ない出土事例から、年代の一端を把握するのが限界である。ゆえに以下で示す年代観は、“存在していた時期”を点で捉え、その点と点との間を繋ぐことによって求めざるを得なかったものであることを断っておきたい。

1. 越高遺跡出土の「鋸歯鋸」の再検討

鋸歯尖頭器の出現時期を示すものとして従来から評価されてきた資料に、越高遺跡（長崎県対馬市）出土の「鋸歯鋸」がある【図12】。隆起文土器および縄文時代早期の前平式が伴う包含層から出土したものである（坂田 1978）。頁岩製で直線的な基部と正三角形様の形状を持ち、刃部には大きな剥離による粗い鋸歯が施されている。本稿の分類では「その他」に一括

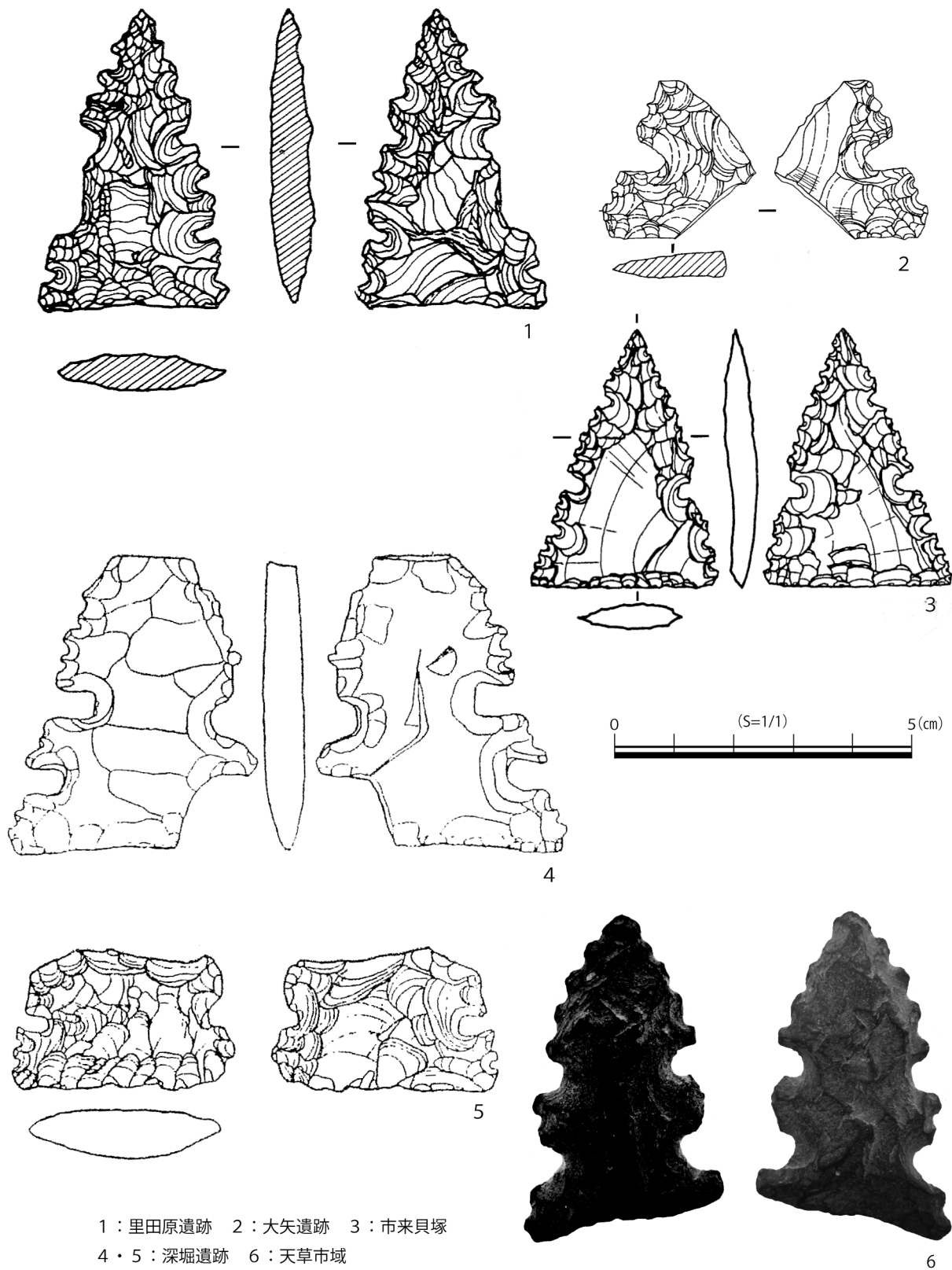
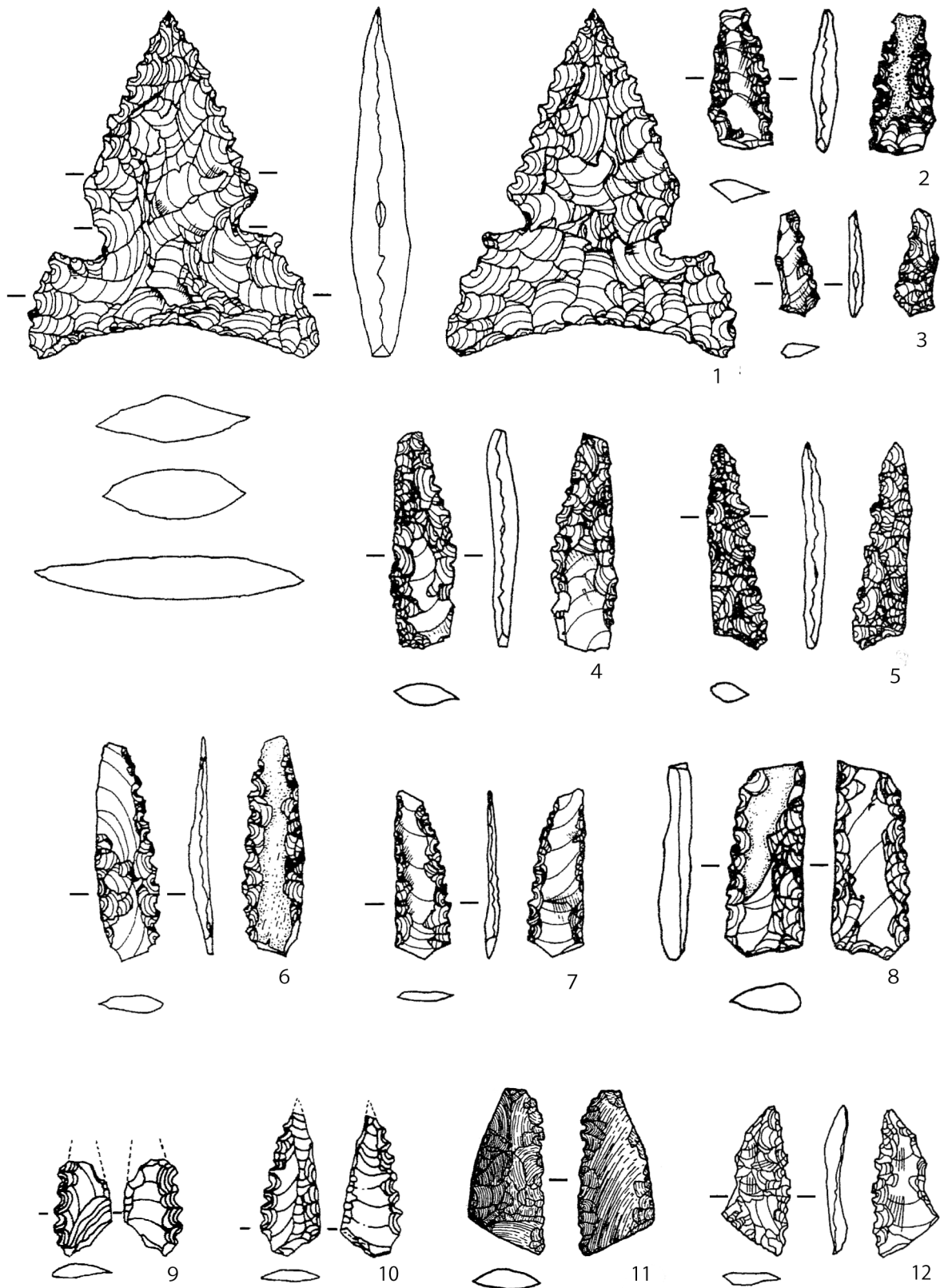


図7 深堀型



1~8 : 門前遺跡 9・10 : 浜泊遺跡
 11 : 宮下貝塚 12 : 宮ノ首遺跡

0 (S=1/1) 5(cm)

図8 門前型①

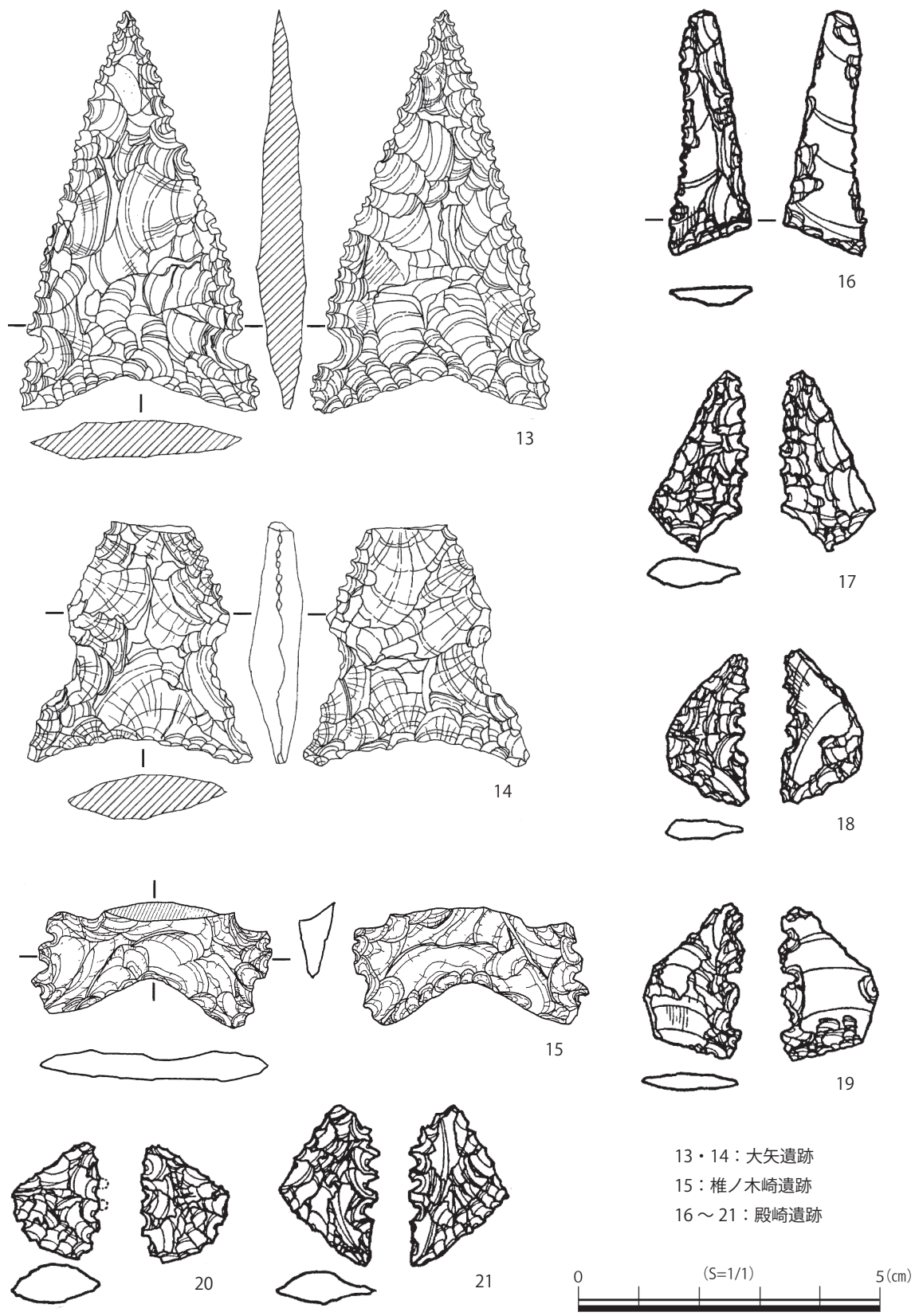
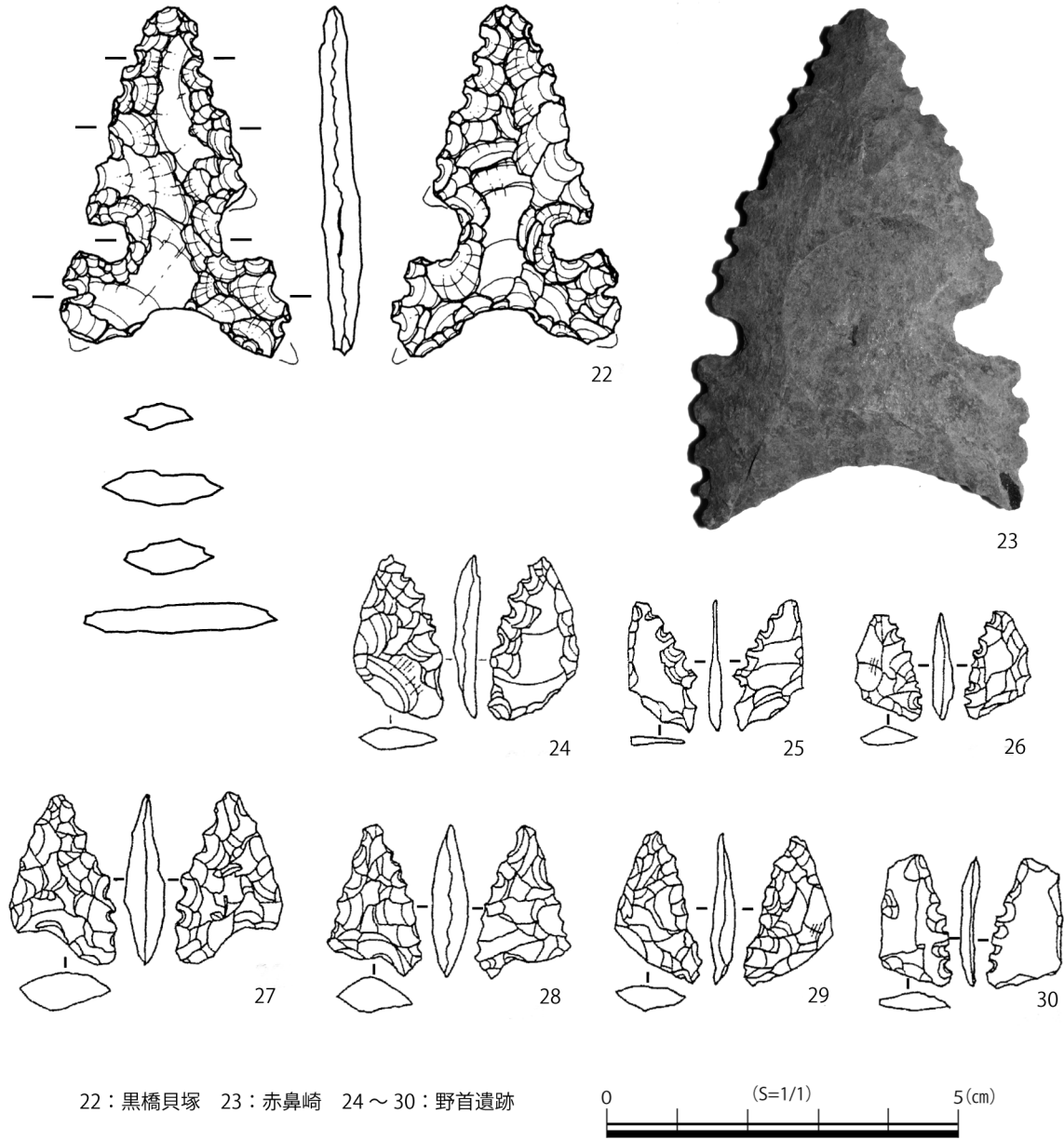


図9 門前型②



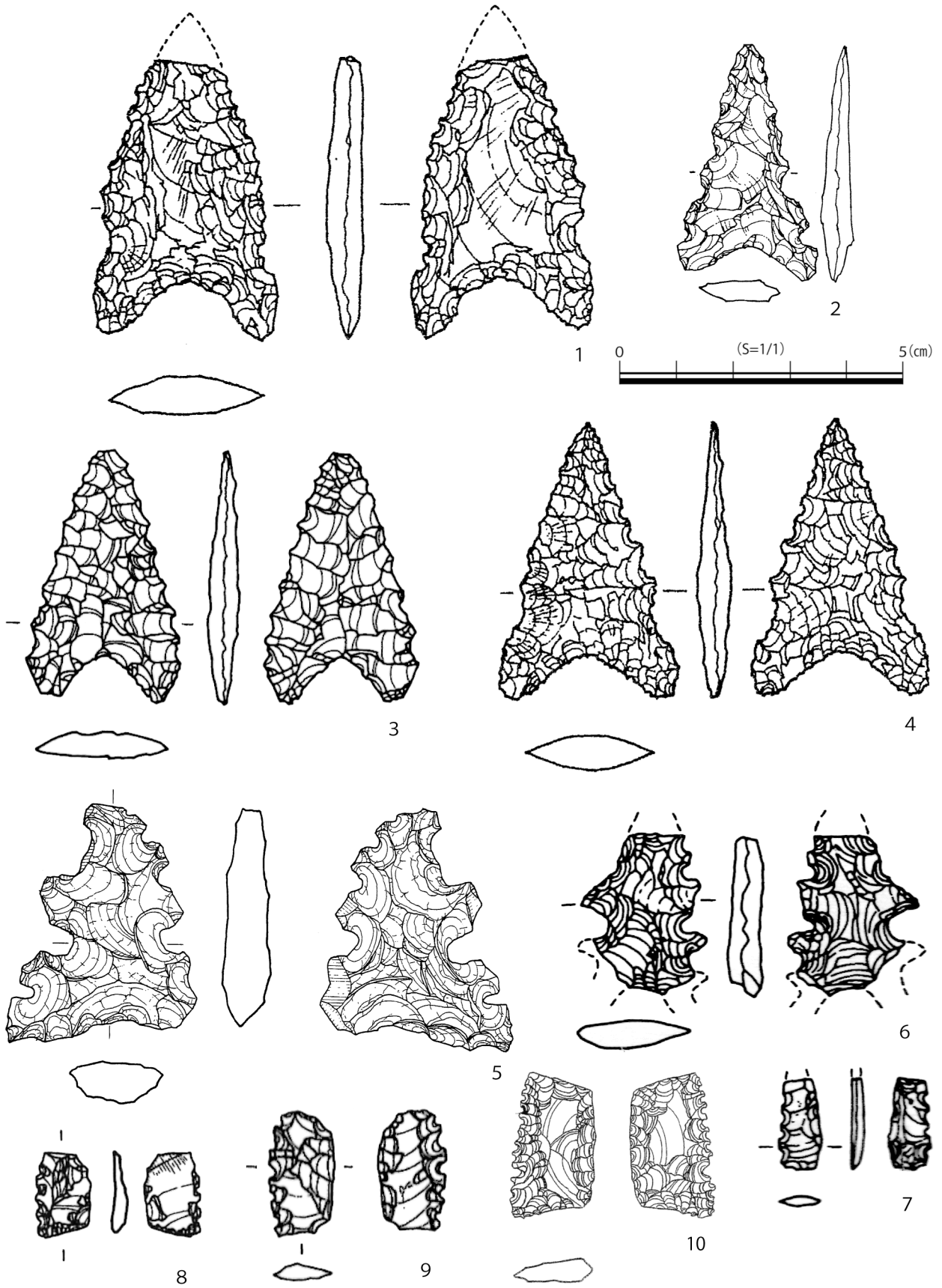
22：黒橋貝塚 23：赤鼻崎 24～30：野首遺跡

図 10 門前型③

されるものである。石鋸は伴っていない。

当遺跡は、出土した土器のほとんどが隆起文土器であることから、朝鮮半島から渡航してきた集団によって形成された遺跡とする評価がある（木村 2003 など）。さらに、文岩里遺跡（江原道高城郡）で類似した形態を持つ鋸歯尖頭器と、これに組み合わせとみられる石鋸【図 20-2】が出土していることから、この「鋸歯鋸」についても朝鮮半島からの搬入が想定されている（中尾 2009）。しかし、縄文時代早期から前期前葉の隆起文土器集団は対馬を交流の最終目的地としていたとする古澤義久の指摘を踏まえれば（古澤 2014）、すくなくともこの段階に朝鮮半島から九

州へ鋸歯尖頭器・石鋸が拡散・定着した可能性は低い。九州では同時期の確実な鋸歯尖頭器・石鋸の出土例が確認できない点も、このことを後押しする。また、越高遺跡の「鋸歯鋸」が前平式の年代から縄文時代早期に位置づけられるとすれば、文岩里遺跡の鋸歯尖頭器・石鋸は新石器時代前期の包含層から出土しているので（朴玟貞 2003）、「鋸歯鋸」よりも後出するものである可能性が高い。これらのことから越高遺跡出土の「鋸歯鋸」を鋸歯尖頭器の出現を示す資料として扱うことは適当ではなく、鋸歯縁を持つ大型の石鋸様の製品として捉えることが妥当であると思われる。



1・3：つぐめのはな遺跡 2：大野原遺跡 4：魚洗川B遺跡 5：椎ノ木崎遺跡
6・7：名切遺跡 8：大友遺跡 9：頭ヶ島白浜遺跡 10：沖ノ原貝塚

図 11 その他の鋸齒尖頭器・石鋸

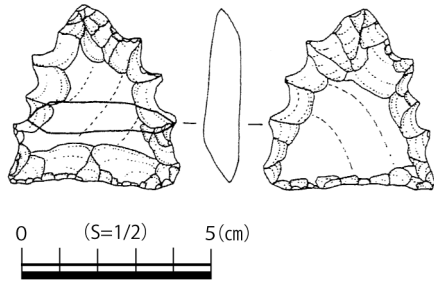


図 12 越高遺跡出土「鋸齒鋸」

なお石鋸については、赤松海岸遺跡（8）のように早期の塞ノ神式を含む包含層から出土した例がある（明瀬編 1989）。しかし、いずれの例もそれより新しい時期の土器が混在している。

2. 各類型の年代

続いて、類型ごとに共伴した土器型式から時期を絞り込むことのできる出土事例を列挙して、年代の把握を試みる。

①徳蔵谷型

天神山貝塚（2）で鋸齒尖頭器と石鋸が中津式と福田 K II 式を伴う層から出土している（前川編 1974）。鋸齒尖頭器 1 点と石鋸 5 点が出土した徳蔵谷遺跡（6）の SX611 土層では、坂の下式と中津式が共伴した（田島編 1996）。佐賀貝塚（11）では鐘崎式・北久根山式の層から（正林編 1989）、深堀遺跡（44）では西平式を伴う層から（内藤編 1967）、それぞれ石鋸 1 点が出土している。坂の下式・中津式・福田 K II 式・鐘崎式・北久根山式・西平式との共伴事例から、後期初頭から中頃の年代が与えられる。

②下谷型

白浜遺跡（33）で鐘崎式・市来式・北久根山式の層から石鋸 2 点が（安楽編 1980）、天神山貝塚（2）で中津式・福田 K II 式の層から（前川編 1974）、田川遺跡（16）で坂の下式の層から（中田・高原編 1997）、つぐめのはな遺跡（21）で阿高式の層から（正林・村川編 1986）、大矢遺跡（51）で南福寺式の層から（山崎編 2007）、それぞれ石鋸 1 点が出土している。野首遺跡（25）では並木式と鋸齒尖頭器 1 点が近接して出土したと報告されているが（塚原編 2003）、同層には他の型式の土器も含まれているようであり、注意が必要である。阿高式・坂の下式・南福寺式・鐘崎式・市来式・北久根山式との共伴事例から、中期末から後期中頃に位置づけられる。

③深堀型

深堀遺跡（44）で西平式を伴う層から鋸齒尖頭器

2 点が出土している（内藤編 1967）。大矢遺跡（51）では南福寺式の層から（山崎編 2007）、市来貝塚（57）からは中津式・出水式・福田 K II 式・指宿式の層から（新東・児玉編 1993）、それぞれ鋸齒尖頭器 1 点が出土している。南福寺式・出水式・指宿式・西平式より、後期前葉から中頃の年代が押さえられる。

④門前型

標式遺跡である門前遺跡（38）で出土した鋸齒尖頭器 1 点と石鋸 7 点は、坂の下式の包含層からの出土である（副島編 2006）。白浜遺跡（33）（安楽編 1980）と宮下貝塚（35）（賀川編 1971）では、両遺跡とも石鋸 1 点が鐘崎式・市来式・北久根山式を伴う層から出土している。大矢遺跡（51）では鋸齒尖頭器 2 点が南福寺式と伴っている（山崎編 2007）。坂の下式・南福寺式・鐘崎式・市来式・北久根山式との共伴により、後期初頭から中頃に比定されよう。

⑤その他

「その他」として一括した資料のなかにも、時期の特定が可能なものが存在する。つぐめのはな遺跡（21）で阿高式の層から鋸齒尖頭器 2 点が出土している（正林・村川編 1986）。佐賀貝塚（11）では鋸齒尖頭器 6 点と石鋸 1 点が鐘崎式・北久根山式に伴って出土した（正林編 1989）。志多留貝塚（9）で鐘崎式・北久根山式・宮下式・西平式の層から石鋸 1 点が（坂田 1976）、白浜遺跡（33）でも鐘崎式・市来式・北久根山式とともに 6 点（安楽編 1980）が出土している。

3. 終焉時期

鋸齒尖頭器・石鋸の終末段階を示す可能性のある資料として、縄文時代後期後葉から弥生時代に位置づけられている事例がいくつか存在する。ケイマンゴ遺跡（40）では黒川式とともに「その他」石鋸 1 点が出土した（横山編 1980）。磨屋町遺跡（43）では太郎迫式・黒川式および弥生土器が伴う層から下谷型石鋸 1 点が出土している（宮下編 2002）。大友遺跡（7）では弥生時代前期と中期の土器を中心とする層から「その他」石鋸 1 点が認められているが（藤田・中川編 1981）、少数ながら夜白式も含まれているようである。これらの事例から石鋸は、縄文時代の終末—弥生時代の開始期ころまで用いられていた可能性があるが、まとまった事例がなく結論づけることは難しい。

鋸齒尖頭器では、弥生時代中期初頭に位置づけられてきた里田原遺跡（22）の「鋸齒鋸先」がある（正林編 1976）。黒曜石製で直線的な基部と二等辺三角形様の全体形状を持つが、鋸齒には顕著な規則性は認められない。本稿の分類では深堀型に分類されるもの

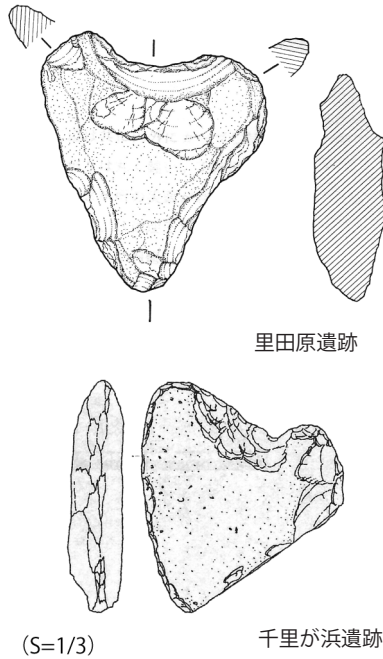


図 13 双角状礫器

であるが、城の越式を伴う包含層からの出土である。ただし出土状況はやや特殊で、包含層上部に地点的に認められた礫群に混在していたという。注意したいのは、この礫群からは「尖頭状礫器」「双角状礫器」などと呼ばれる石器が認められていることである。岩礁に生息する貝を剥ぐための潜水漁具であると考えられているもので（坂本・坂本 1971）、当地域の沿岸部の縄文時代の遺跡においても一般的に認められている。周辺でも近接する前目遺跡（高野編 1987）や、海峡を挟んで面する平戸島の千里ヶ浜遺跡（福田編 2002）で同様の石器が認められている【図 13】。遺跡内では若干ながらも縄文時代後期の遺物が認められていることも踏まえれば、「鋸齒鋸先」もこれらの礫器とともに本来はこの時期に属するものであったと推測される。何らかの理由によって尖頭状礫器・双角状礫器とともに礫群の一部となり、弥生時代中期初頭段階に埋没したものであると理解したい。

4. 鋸齒尖頭器・石鋸の年代

以上のことから鋸齒尖頭器・石鋸は、少なくとも阿高式段階から西平式段階までの間、すなわち縄文時代中期末から後期中頃にはほぼ確実に存在しており、これらが使用されていた中心的な時期として位置づけることが可能であろう。

出現時期および終焉時期については、現時点ではともに明確に示すことはできない。多数型式の土器が混在する包含層での出土例をみても、前期の土器を含

む場合と中期以降の土器のみが伴う事例はおよそ半分であり、傾向はつかめない。しかし、前期の土器のみに伴う例が全く認められないことを考慮すれば、現段階での見通しとして、中期のいずれかの段階で出現したものと捉えておきたい。終焉の時期については、弥生時代に至っても継続して使用されていたとは考え難く、大きく見積もっても縄文時代の最終末期までになぜか残存していた可能性が指摘できる程度である。

VI. 分布の傾向

続いて、各類型の分布の広がりや数量的な傾向を整理する。

1. 徳蔵谷型

徳蔵谷型の分布範囲は、糸島半島・対馬・東松浦半島・北松浦半島・五島列島までの対馬海峡に面する地域と、長崎半島および天草諸島である【図 14- 1】。徳蔵谷遺跡（6）での出土数が圧倒的な量を数え（岩尾編 2003；2004，田島編 1994；1995；1996）、新町遺跡（4）（河村編 1992）と深堀遺跡（44）（内藤編 1967，宮下編 2002）以外の遺跡では、1 または 2 点が数えられているのみである。また、鋸齒尖頭器は徳蔵谷遺跡と天神山貝塚（2）（前川編 1974）のみで確認されており、ほかはすべて石鋸だけが出土・採集されている。

2. 下谷型

下谷型は、熊本平野南端の黒橋貝塚（49）（高木・村崎編 1998）が加わることを除き、徳蔵谷型と分布範囲を同じくする【図 14- 2】。ただし徳蔵谷型の遺跡数は 11 遺跡であるのに対し、下谷型は 29 遺跡で確認されており、遺跡数の差は約 3 倍である（採集遺跡が特定不能な資料を除く）。鋸齒尖頭器は標識遺跡である下谷遺跡（20）（明石編 2002）のほか、赤松海岸遺跡（8）（荻原・久原 1975）、野首遺跡（25）（塚原編 2003）、沖ノ原貝塚（53）（山崎 2002）、浜ノ洲遺跡（55）（松本 2006）で認められており、分布範囲内での地域的な偏りはさほど存在しない。このほかの遺跡は石鋸のみが出土・採集されているが、3 点以上が確認されている遺跡だけでも 6 ケ所を数える。

3. 深堀型

深堀型は、組合う石鋸が判然としない。深堀遺跡（44）と大矢遺跡（51）で石鋸の共伴例があるが、他の遺跡では鋸齒尖頭器のみが単独で確認されている。出土遺跡は里田原遺跡（22）（正林編 1976）、深堀遺

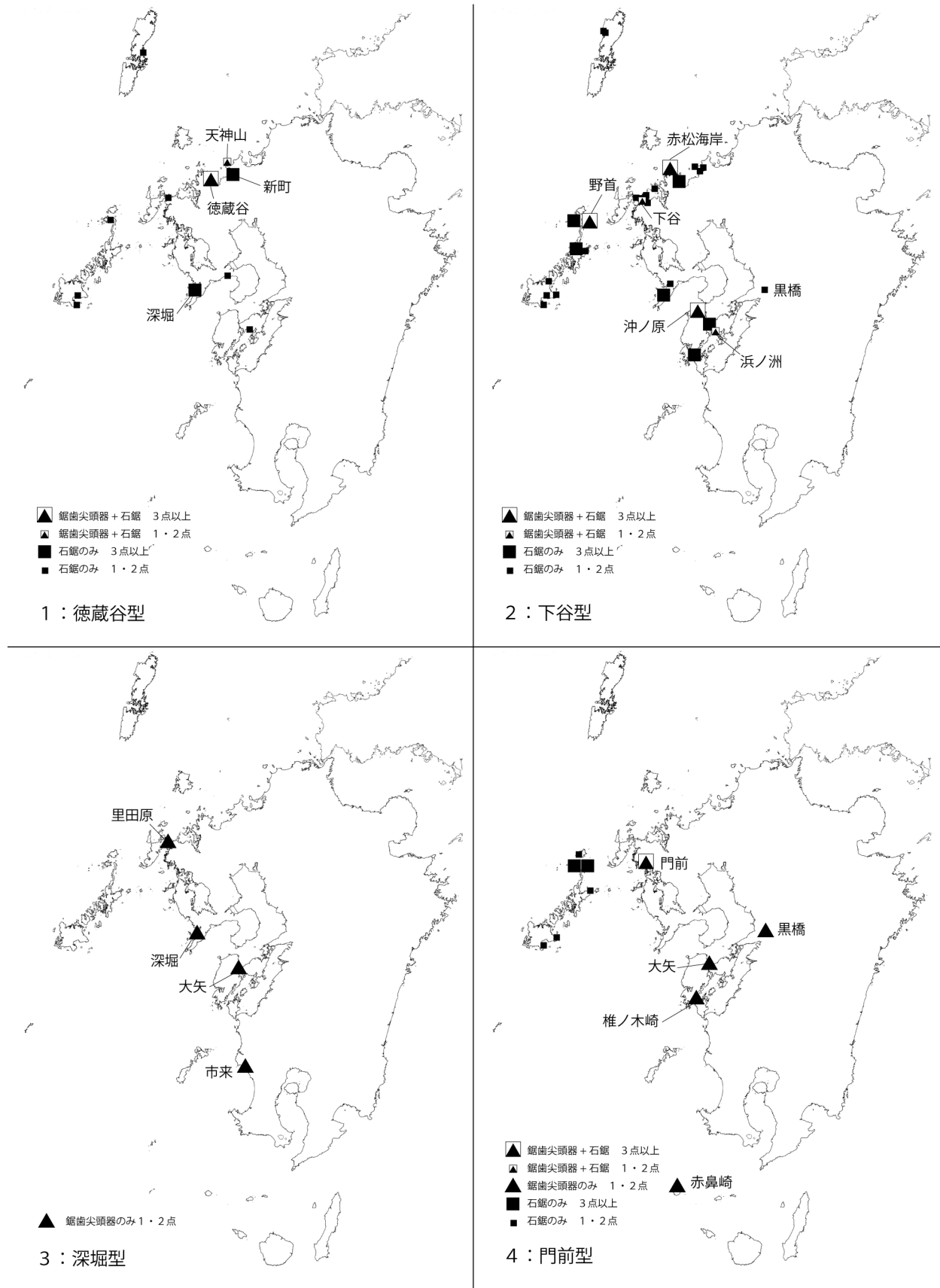


図 14 各類型の分布状況

跡（内藤編 1967）、大矢遺跡（51）（山崎編 2007）および天草市域採集品、市来貝塚（57）（新東・児玉編 1993）のみである。薩摩半島の市来貝塚を除いて徳蔵谷型の分布圏内に収まる【図 14-3】。

4. 門前型

門前型が出土した遺跡は五島列島に集中している。標式遺跡とした門前遺跡（38）（副島編 2006）は、北松浦半島と五島列島が地理的に最も近接する地域に位置しており、一帯に分布のまとまりを見出すことができる。このほかは黒橋貝塚（49）（高木・村崎編 1998）、椎ノ木崎遺跡（54）（富田・松舟編 1989）、大矢遺跡（51）（山崎編 2007）、薩南諸島黒島の赤鼻崎（58）（伊藤 2011）で出土・採集されているが、これらの遺跡ではいずれも鋸齒尖頭器のみが認められている【図 14-4】。

5. その他

その他として分類した一群は、上記 4 型式の分布範囲に加えて、響灘沿岸の山鹿貝塚（1）（中村 1971）および西彼杵半島と島原半島にも出土遺跡が存在している。先述したようにこの一群は型式的なまとまりを見出すことが難しく、鋸齒尖頭器と石鋸との組み合わせ関係も判然としない。しかし遺跡単位では佐賀貝塚（11）（正林編 1989）、名切遺跡（14）（安楽・藤田編 1985）、殿崎遺跡（24）（福田編 1986）、頭ヶ島白浜遺跡（31）（古門編 1996）、宮下貝塚（35）（川道編 1998）、沖ノ原貝塚（53）（山崎 2002）、椎の木崎遺跡（54）（富田・松舟編 1989）で、その他の鋸齒尖頭器と石鋸が伴って認められた例もある。

6. 鋸齒尖頭器・石鋸出土採集遺跡の立地環境

全体を通じた遺跡の立地の傾向としては、島嶼部や沿岸地域など海に面した地域の遺跡から出土する例が圧倒的である。さらには湾の最奥部や島の背後など、自然地形によって保護された漁村の伝統的な土地利用形態（土井・堀 1996）とも共通する立地上にある場合が多い。やや内陸部の遺跡の場合でも、いずれも海までの距離はさほど遠くない位置に立地している。研究史上、鋸齒尖頭器・石鋸を刺突漁撈具として認識する根拠として、海岸線に沿って出土遺跡が分布していることが理由のひとつとしてあげられてきたが、本稿での分析結果もこれを裏切るものではなかった。

以上、資料集成の結果をもとに鋸齒尖頭器・石鋸の型式・年代・分布を整理してきた。次章以降ではここまでの検討結果を踏まえて、鋸齒尖頭器と石鋸が出現

した背景と展開の様相について検討を進めていく。

VII. 鋸齒尖頭器・石鋸の系譜

1. 研究の現状

鋸齒尖頭器と石鋸の系譜をめぐる議論のはじまりは、戦前に行われた東三洞貝塚の発掘調査である。この発掘は及川民次郎が出土した隆起文土器に縄文土器からの影響を認めたように（及川 1933）、土器交流研究の出発点でもある記念碑的な調査であった。このことも背景にあり、及川は石鋸も九州から伝播したものと推測したことはすでに述べたとおりである。また、朝鮮半島東北部の咸鏡北道の茂山で自ら“石鋸”を発見しているという横山将三郎が、東三洞貝塚の石鋸はそれとは形態的に異なっていると述べていることは重要である（横山 1933）⁽²⁾。

これとは逆に、朝鮮半島はもとより、シベリアや西アジアまでをも含めた系譜の中に石鋸を位置づけようとしたのが芹沢長介であった（芹沢 1965；1968）。石鋸を收穫具として捉える見解は、深堀遺跡での鋸齒尖頭器の出土（内藤編 1967）とこれを受けた佐原真による批判（佐原 1968）により支持を失っていく。ただし議論の焦点は用途論にあり、九州の石鋸と朝鮮半島あるいはそれ以北の“石鋸”との系統関係の存否が結論づけられたわけではなかったことには注意が必要である。この既存の枠組みを応用して、農耕具から漁撈具に問題を入れ換えて、再び石鋸を鋸齒尖頭器とともに議論の俎上に乗せたのが渡辺誠であったといえるだろう（渡辺 1985）。鋸齒尖頭器と石鋸の系譜を朝鮮半島さらには大陸方面へと求める見解はこのような流れのもとに表明され、以後長く一定の支持を集めてきたのである。

このような渡辺らの想定に対し、山崎純男のように朝鮮半島北部以北の“石鋸”と九州・朝鮮半島南部の石鋸との繋がりを否定する意見もあったことは重要である（山崎 1988）。距離的に大きな隔りがあること、また朝鮮半島北部以北では内陸部の遺跡から出土しており、大型品が多く形態にも違いが認められることがその根拠である。IV章で提示した各類型の実測図と横山が提示した油坂（農圃）貝塚（咸鏡北道鏡城郡）の“石鋸”の図【図 20-1】とを見比べてみても、全長が 8 cm 前後におよぶものがあつたり、両側縁に鋸齒を施していたりするなど相違は大きく、やはり両者を同一の系譜上に位置づけるには問題が多い。

また、九州での鋸齒尖頭器・石鋸の出土・採集遺跡数と点数に比べれば、朝鮮半島ではごく少数に限られた遺跡からわずかな点数のみが確認されている状況が

あり、分布の数量に圧倒的な差があることが指摘されている（金建洙 1997 など）。このような朝鮮半島側の状況を考慮すれば、“九州への小規模な波及後に爆発的に流行した”と解釈しない限りは、もはや朝鮮半島からの伝播をも想定し難い。現に鋸歯尖頭器・石鋸を「縄文系石器」として扱う研究者も存在する（鄭澄元・河仁秀 1998 など）。

2. “鋸”としての鋸歯鋸

では、鋸歯尖頭器・石鋸が九州側で考案されたものであるとすれば、どこでどのような背景のもとで出現したのであろうか。

先述したように、現時点では鋸歯尖頭器・石鋸の出現時期を特定することは困難である。特定可能であった範囲内での年代では、下谷型が阿高式段階に出現し、続いて坂の下式段階の徳蔵谷型、南福寺式段階の類徳蔵谷型の順で現れる。このことから相伴土器型式の年代上では下谷型→徳蔵谷型→類徳蔵谷型という変遷も想定可能であるが、土器一型式分の差をもって前後関係を判断するのは現状では問題であろう。

そこで注目したいのは、徳蔵谷型の鋸歯尖頭器の出土事例が、唐津湾地域にある徳蔵谷遺跡と天神山貝塚に限定されていること、そして当地域の同時期の遺跡からは凹基型の鋸歯鋸が多量に出土している点である。徳蔵谷遺跡では、5 次わたる発掘調査によって 50 点の鋸歯鋸が出土している（岩尾編 2003；2004、田島編 1993；1994；1995）。天神山貝塚からの鋸歯鋸の出土は 2 点と少数だが（前川編 1974）、近接する新町遺跡では鋸歯尖頭器こそ出土していないものの、徳蔵谷型石鋸 4 点とともに鋸歯鋸 27 点が確認されている（河村編 1992）。

これらのことから仮説として提示したいのは、鋸歯尖頭器・石鋸の出現地は当地域であり、それは鋸歯鋸から発展したものである可能性である。

沿岸部や河川流域の遺跡から出土する石鋸を、刺突漁の道具として捉えることは自然な発想であると思われるが、その論拠を示した研究は数少ない⁽³⁾。

そもそも刺突漁具、特に“鋸”にはどのような機能的特徴があるのだろうか。高橋健は鋸頭の機能として次の 5 項目をあげる（高橋 2001）。ただし高橋は鋸頭を「獲物の体に刺さった後にその先端部が柄から外れて動物の体内に留まり、先端部に結びつけられたつなにより獲物を確保する機能をもつもの」と定義しているため、柄に固定された石鋸を鋸（固定鋸）として用いた場合には③の離頭機能は存在しない。

①固定機能 鋸頭が柄に固定される

- ②刺突機能 鋸頭が獲物に刺さって獲物の体内に入る
- ③離頭機能 鋸頭が柄から外れる
- ④抵抗機能 鋸頭が抵抗を受けて獲物の体内に留まる
- ⑤繫留機能 鋸頭が繫索により狩猟者ないし浮き袋などに繫ぎ留まる

問題としたいのは④の抵抗機能である。石鋸を鋸として用いた場合、抵抗機能は脚部＝距（けづめ）によって発揮される。【図 15】は繫索が索孔にループ状に通された場合の恵山型鋸頭に働く力の概念図である（高橋 2001；2008）。左右対称の距を抵抗装置として持ち、かつ獲物の体内での回転を伴わない点において、凹基型の石鋸と同質の力が働いていると判断される。力の働く方向は単純であり、F 方向に繫索によって引っ張られる力に対して、R s 方向へ獲物の体内から離脱しないように抵抗力がかかる。抵抗装置は左右の距だけであるので、当然負担はこの部分に集中することとなる⁽⁴⁾。

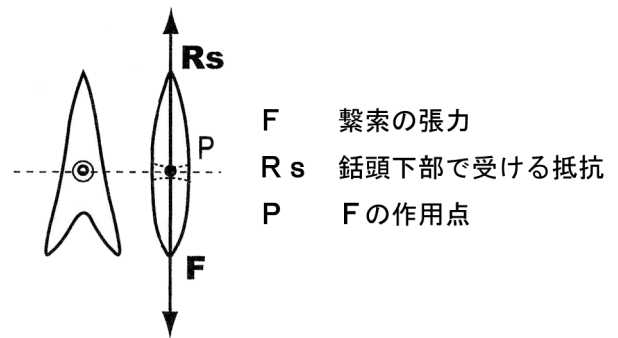
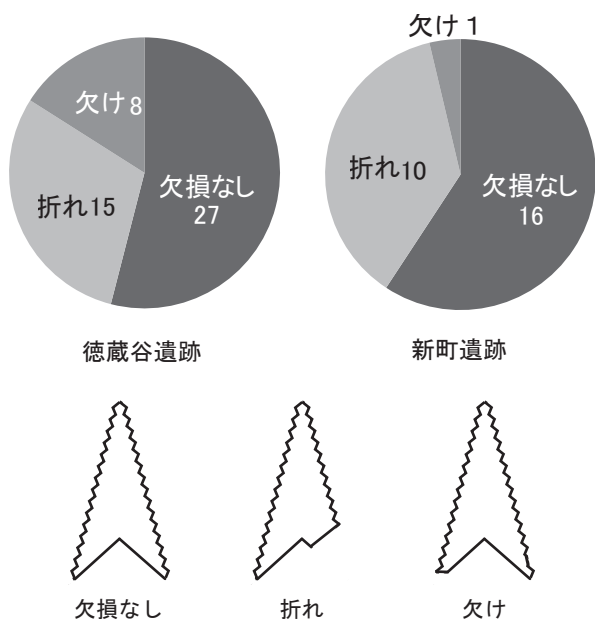


図 15 恵山型鋸頭に働く力

【表 2】は徳蔵谷遺跡と新町遺跡から出土した鋸歯鋸の脚部の欠損状況を集計したものである。欠損がほとんど認められないものを「欠損なし」、根元付近から折れているものを「折れ」、先端や鋸歯が欠けているものを「欠け」として分類している。徳蔵谷遺跡では、計 50 点のうち欠損なしは 27 点、折れは 15 点、欠けは 8 点を数えた。このことから半数近くが脚部に何らかの欠損が生じていることがわかる。新町遺跡では、計 27 点のうち欠損なしが 16 点、折れが 10 点、欠けが 1 点あり、約 4 割に欠損が生じている。

この比率がどのような意味を持つのかを考えるために、御堂島正による陸上動物への使用を想定した試射実験に基づくデータと比較したい【表 3】（御堂島 1991;2005）。この実験ではブタの肉を獲物に見立てて弓で射出した凹基型石鋸 20 点を対象に、各個体の破損の有無と発生部位が記録されている。射出回数は計 46 回で、各個体は破損・柄からの脱落・柄の破損

表2 徳蔵谷遺跡・新町遺跡出土鋸齒鋸の脚部欠損率



のいずれかが発生した時点まで射出が繰り返された。このうち 20 回は失敗または命中後跳ね返って対象物から抜け落ちたものである。残りの 26 回は、命中後に対象物内で鋸鋸が行方不明になった 1 回を除いて、回収のため対象物からの引き抜きが行われている。

この実験によって脚部に欠損が発生した資料は 2 点に過ぎず、いずれも引き抜きの際に柄から外れて対象物の中に残ってしまったものである。うち 1 点の折れ面には一端に凸部が存在することから、ねじれて折れたことが推測されている。おそらくは引き抜きの際に脚部が筋に引っ掛かるなどして、瞬間的に強い抵抗が発生したためと考えられる。

この御堂島による実験からまず理解されるのは、陸

表3 御堂島 1991 の実験結果

実験No	試射回数				ダメージ				備考
	形態	合計	失敗	跳ね返り	先端	側縁	逆刺	基部	
Ob-268	石鋸	3	2		-	-	-	-	
Ob-269	*	1			E	-	-	-	
Ob-270	*	3	1		-	-	A	-	
Ob-271	*	3	1		C	-	-	-	
Ob-272	*	3	2		-	-	-	-	
Ob-273	*	2	1		-	-	-	-	
Ob-274	*	2			-	-	-	-	
Ob-275	*	1			-	-	A	-	
Ob-276	*	2	1	1	B	-	-	-	2回目杭にあたる
Ob-277	*	1			C	-	-	-	
Ob-278	*	5	1	1	-	-	-	-	
Ob-279	*	2			C	-	-	-	
Ob-280	*	1			C	-	-	-	
Ob-281	*	2			H	-	-	-	2回目木にあたる
Ob-282	*	1			-	H	-	-	
Ob-283	*	5	4	1	/	/	/	/	行方不明
Ob-284	*	3	2		/	/	/	/	行方不明
Ob-285	*	3	1	1	/	/	/	/	行方不明
Ob-286	*	1			-	-	-	-	
Ob-287	*	2	1		-	-	-	-	

A:折れ B:影器状剥離 C:縦溝状剥離 D:AとBの複合 E:AとCの複合 F:BとCの複合
G:A・B・Cの複合 H:その他

上で弓を用いて石鋸を射出した場合、獲物に命中したものであっても、脚部に損傷が発生する確率は極めて低いということである。その理由としては、繫留機能がないため獲物を引っ張る力Fが鋸として使用した場合に比べて少なく、また獲物の死亡などによって静止している状態で引き抜きを行えば獲物そのものが発生させる抵抗力Rも減少するため、脚部にかかる負担が比較して少なくなることが考えられる。水中でもヤスとして柄を持ったまま刺突した場合は同様の結果が得られるだろう。

御堂島の実験結果と比較すると、徳蔵谷遺跡・新町遺跡出土の鋸齒鋸が非常に高い脚部欠損率を示していることは明らかである。その要因はこれらが脚部に強い抵抗力が働く作業、すなわち鋸として用いられていた道具であったためであると理解したい。

3. 鋸齒尖頭器・石鋸の成立

ひとつの遺跡から出土した全個数の約半数近くに脚部の破損が認められるという傾向は、一方では耐久性の低さをも指し示しているといえる。徳蔵谷遺跡・新町遺跡の鋸齒鋸の場合、脚部は幅5mm・厚さ3mm程度にすぎない。

高橋健は鋸頭の刺突機能と抵抗機能とは相反する関係にあると指摘する(高橋 2011)。刺突機能の向上を目指す分だけ鋭利で細い形態となっていくが、その反面で抵抗機能は減少していつてしまうのである。この問題を解決するための努力は、つぐめのはな遺跡で多量に出土・採集されている石鋸に、他種多様な形態が存在していることにも現れている(川道 2007: 2103, 正林・村川編 1986, 橋 1979)。徳蔵谷遺跡と新町遺跡の鋸齒鋸の場合には薄くて細く鋭利であるため、かなり刺突機能に重点を置いていることが推測される。しかし同時に、そのことが仇となって抵抗装置が脆弱化してしまうという問題も抱えていたのである。

このような鋸齒鋸の弱点を補強するとともに性能を向上させることによって出現したものが、鋸齒尖頭器と石鋸であると考えたい。そのための方法としてまず想定されるのは、大型化を図ることによって刃部の長さや重量を増大させて、より殺傷能力を向上させるという手段がある。これにより漁の対象となる種の幅が広がることも推測される。しかし凹基型の鋸齒鋸の形態がそのまま大型化したとすると、徳蔵谷型の鋸齒尖頭器は平基型であるので、両者の間には形態的な関係性を見出し難くなる。しかしこのことこそが、石鋸の出現と性格を明らかにするうえでの重要な手がかりとなるのである。

【図 16】の左は中尾篤志による徳蔵谷遺跡出土の鋸歯尖頭器と石鋸の装着状況の想定図で、実際の半分（中尾 2009）。その隣は徳蔵谷遺跡の鋸歯鋸の実物大の実測図で、全幅の約半分である直径 8 mm の柄が装着されると仮定し、その部分を灰色で塗った。両者を比較してみると、柄に装着された状態の鋸歯尖頭器・石鋸と鋸歯鋸は、共通した構造を持っていることが見て取れる。すなわち、鋸歯尖頭器と石鋸を凹基型鋸歯鋸に見立てると、鋸歯尖頭器が頭部に、石鋸が脚部の位置に収まるのである。このことから、鋸歯尖頭器と石鋸によって構成される“組合せ式石鋸”は、凹基型鋸歯鋸が大型化する過程で体部と脚部を別造りにする発想により成立したものであることが予想される。

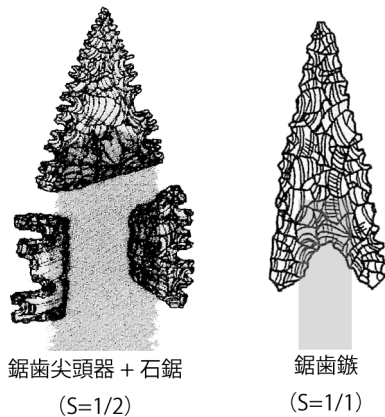


図 16 徳蔵谷遺跡出土の鋸歯尖頭器・石鋸と鋸歯鋸の着柄想定図

徳蔵谷遺跡から出土した徳蔵谷型石鋸に認められる欠損の比率を整理したものが【表 4】である。欠損が認められないものや、鋸歯の先端の 1 または 2 箇所程度の軽微な欠けが生じているものは約半数である。鋸歯先端の欠けが目立つものは表に示したように 3 種類のパターンがあり、全体の 35% を占める。「偏り」としたものは、刃辺の一方側の端部に欠けが生じているものである。おそらくは欠けのある側が下向きとなって装着され、距として機能したことにより破損したものと考えられる。「中央残り」は刃辺の両端部が欠けているもので、一方側に欠損が生じた際に、上向きだった側を下向きに付け替えて使用したことが想像される。また、徳蔵谷遺跡出土の石鋸のうち【表 1】不明として分類した資料のなかには、

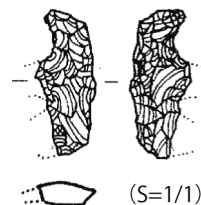
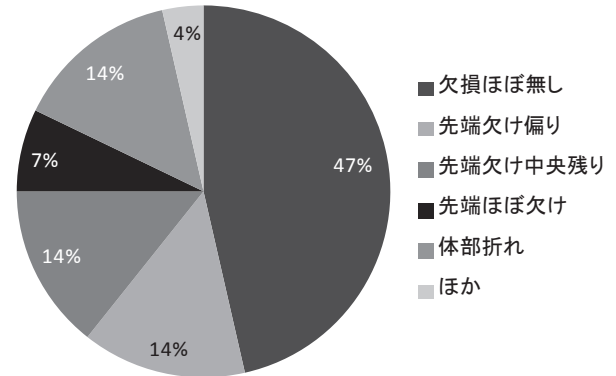


図 17 着柄部分のみが残存した石鋸

表 4 徳蔵谷遺跡出土石鋸の欠損パターンとその比率



鋸歯の全てが根元で折れてしまっている資料が複数含まれていることにも注意したい【図 17】。これらは柄と接していた部分を残して大部分を失ってしまったものと思われ、同様に抵抗時に働いた力が原因によるものと考えられる。

次に、鋸歯尖頭器と石鋸の出土比率の差に注目したい。徳蔵谷遺跡では現在までに 6 点の徳蔵谷型鋸歯尖頭器が出土しているのに対し、徳蔵谷型石鋸は 28 点を確認されており、4 倍以上の出土量差がある。鋸歯尖頭器 1 点に対して 2 点の石鋸が組合うとして、半分以上が余ってしまう。おそらくこの石鋸の合計数には、交換用の備蓄分や廃棄品も含まれていると想定される。

先述したとおり、徳蔵谷遺跡と新町遺跡の鋸歯鋸は刺突機能に重点が置かれた形態をしている。大型化にあたってこの機能が重要視されたであろうことは、平面形からうかがえる鋭利さを見れば明らかであるが、より重要なのは断面の厚さである。徳蔵谷遺跡から出土した鋸歯尖頭器 6 点の厚さの平均は約 6.3mm であるのに対して、鋸歯鋸には厚さ 5 mm 程度のもも多く存在し、両者の差はさほど大きくない。一方で全長・全幅は 1.5 ～ 2 倍の差がある。このことは厚さ＝耐久力を犠牲にしながらも、より刺突機能の向上を求めたことを示唆する。

以上のことから石鋸は、破損の頻度が高い脚部部分を別造りにして交換を容易にすることで、運用の効率化を図るために考案されたものであったと考えたい。この想定は、唐津湾地域以外の遺跡では 1 ～ 3 点の石鋸のみが単独で認められる現象への解釈についても見通しを与える。おそらくこれらの遺跡は徳蔵谷型鋸歯尖頭器・石鋸を用いた人々の活動が及んだ場所であり、各遺跡に残された徳蔵谷型石鋸は廃棄品か交換部品であったのだろう。

VIII. 鋸齒尖頭器・石鋸の展開

続いて、徳蔵谷型の出現後に他の類型がどのように出現し展開していったのかを考察するとともに、朝鮮半島で確認されている鋸齒尖頭器・石鋸をどう位置づけるべきかについても検討したい。

繰り返すことになるが、各類型の先後関係は現状では共伴した土器型式から推測することは難しい。また各類型は併存期間が重複しており、さらには複数の類型がひとつの遺跡の同じ層から確認された状況も複数例あるため、各類型が時間を画して交替していくような状況は当然ながら想定できない。そのためこれら各類型間の関係性を捉えるには、年代差よりも形式的な変化や分布傾向に着目する必要がある。

1. 下谷型

徳蔵谷型との類縁性が高く、分布範囲もほぼ重なるが、それよりも出土数が多く、また鋸齒尖頭器も地域的な偏りが少ない下谷型は、徳蔵谷型を各地域で再現したものと理解したい。徳蔵谷型との差異を端的に特徴づけるのは、やはり鋸齒の形状であろう。徳蔵谷型の鋸齒尖頭器・石鋸については鋸齒の加工の精巧さから、儀器的な性格を想定する見方があることは前に触れた。しかし鋸齒鋸からの繋がりを前提にすれば、中間に大きな剥離を挟むことによって、むしろ加工の省力化を図っているとも捉えられる。さらには【図4】の11と15を比べると、15の方が第1段階の剥離の幅・深さが大きく、より省力化が進んだ形態であるとも推測される。下谷型の場合は徳蔵谷型の第二段階目の加工そのものも不要として省略されたものといえよう。さらには【図5】の3と10を比較するとわかるように、下谷型のなかでもさらに省力化が進むようである。

鋸齒尖頭器の基部が凹基化するのも下谷型での変化のひとつである。単体だと距として機能するが、石鋸と組合った場合には逆鉤（高橋 2001）となり、抵抗力の増強が図られたものと思われる。石鋸は全体に小型化する傾向にあり、台形や半月形に近い形状のものも増える。背部と側部との転換点をはっきりと造り出す徳蔵谷型からの型式変化により生じた現象と考えられる。

2. 深堀型

深堀型もやはり徳蔵谷型の変容によって出現したものであると考えられる。鋸齒は徳蔵谷型の省力化が進んだ資料と類似するが、規則性を失っているうえに、

鋭利さに欠け、加工も粗い。ここまでの鋸齒の変遷については、【図18】に整理した。

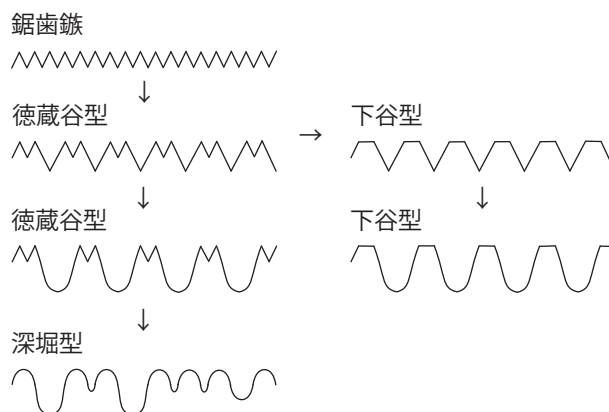


図18 鋸齒の変遷

3. 門前型

他の3類型に対して、門前型は少し異なる展開を見せている。

門前型の前段階に位置づけられる可能性のある資料として、つぐめのはな遺跡の阿高式段階の層から出土した、「その他」に分類される鋸齒尖頭器がある【図11-1・3】。注意したいのは、これらが体部の中央やや下あたりに若干のくびれを持つ点である。さらには、時期は明確ではないが、門前型鋸齒尖頭器が出土した椎ノ木崎遺跡などで、明確な挟りを刃部中央やや下にもつ石鋸が確認されている【図19】。これらと門前型の鋸齒尖頭器との形態的な違いは、ほぼ刃部に鋸齒を持つか否かに限られる。同様な形態的特徴をもつ資料として、弥生時代のいわゆる“アメリカ式”石鋸が知られている（石原 1996, 坂本 1995）⁽⁵⁾。このような刃部への挟りは着柄作業の簡便化を目的とするものであると考えられており、おそらくは同じ効果を狙っ

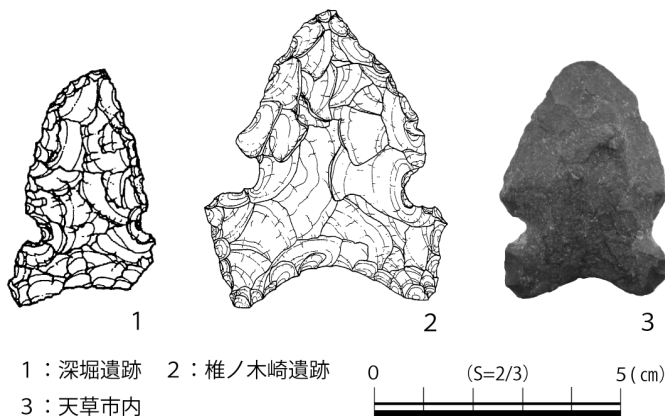


図19 アメリカ式石鋸形石鋸

て九州の縄文時代の石鋸にも施されたものであろう。かなり浅薄で論拠に乏しい考察とはなるが、このようなアメリカ式石鋸形の石鋸が、鋸歯尖頭器・石鋸の影響を受けて成立したものが門前型であるところでは理解しておきたい。

5. その他

「その他」として一括した一群は年代的にも分布状況からもまとまりが見出し難く、各類型との形態的な繋がりも明確に読み取ることができない。鋸歯尖頭器と石鋸が同一遺跡内で出土している例については、ひとまずは組合って使用されていた可能性もあるが、状況は同じである。

そもそもその他の石鋸については水ノ江が指摘しているように、「使用により浅いもしくは不規則な鋸歯状の剥離が生じた剥片」（水ノ江 2012）も多分に含まれている可能性がある。本稿では集成の際に器種認定に問題がある資料は極力排除したが、石鋸の形態自体が刃部の鋸歯を除いて比較的単純であるため、認定が曖昧にならざるを得なかった資料も多くあったことは事実である。

鋸歯尖頭器については、石鋸との組合せを前提とせず、単独で用いていたものも含まれていると考えられる。石鋸未確認地域である島原半島北部に所在する魚洗川遺跡（47）（大谷編 2008）や大野原遺跡（48）（諫見編 2001）での出土事例などはその可能性が高い。

6. 朝鮮半島

朝鮮半島で確認されている鋸歯尖頭器・石鋸も、各時期の土器が混在する包含層や表土中からの出土、あるいは採集品であることが多い。

安島貝塚（趙現鐘ほか 2003）および隣接する安島ガ遺跡（趙現鐘ほか 1994）【図 20-3・4】、および東三洞貝塚の石鋸は（横山 1933, 河仁秀 2007, 尹武炳ほか 2004・2005）【図 21-8 ~ 13】、下谷型の石鋸と捉えて問題ないであろう。また上老大島貝塚の石鋸【図 20-5 下】（孫宝基 1982）は門前型の特徴と一致する。これらの遺跡はいずれも朝鮮半島南岸部沿岸に所在しており、石鋸以外にも土器をはじめとする縄文文化由来の遺物が出土している（鄭澄元・河仁秀 2001, 李相均 2013）。

一方で鋸歯尖頭器として考えられているものは、九州の鋸歯尖頭器のどの類型にも合致しない。上老大島のものは全長・全幅とも小さく、鋸歯も不規則である。鋸歯鋸とした方が妥当であろう。東三洞貝塚では正三角形の全体形状を持つ鋸歯尖頭器があるが【図

21-7】、鋸歯が施されているのは脚部の最下端周辺のみである。また 1933 年の報告にある鋸歯尖頭器は【図 21-6】、細長い二等辺三角形の全体形状に棘状の大きな鋸歯を造り出したものであり、「その他」として分類した一群と比べてもかなり異質である。これらは九州で認められる鋸歯尖頭器とは別種のものとして捉えた方が適当であると思われる。

すると朝鮮半島では石鋸のみが九州から波及したと解釈することとなるが、その要因は徳蔵谷型の拡散背景と同様に、備蓄品または廃棄品がその土地に残された結果であると想定すれば理解しやすい。また消耗品として扱われていた可能性が高い石鋸が、特定の遺跡のみでわずかな数が確認されるという状況は、恒常的な交流の結果というよりも、断続的な接触によるものと理解すべきであろう⁽⁶⁾。

IX. 「漁撈文化（圏）」の再検討

ここまでの検証により、鋸歯尖頭器と石鋸は九州で独自に生み出されたものであり、朝鮮半島で確認される石鋸は九州から断続的に持ち込まれたものが残置された結果である可能性が判明した。また使用されていた年代の中心は縄文時代中期末から後期中頃にあり、弥生時代に至っても引き続き用いられたものではないことも指摘した。

以上の結果を踏まえて「漁撈文化（圏）」そのものの検討に進んでいきたいが、多種の漁撈具の様相から想定された総体的な枠組であることを踏まえれば、その一要素に過ぎない鋸歯尖頭器・石鋸の状況のみでこれを見直すことに意味があるとは思えない。そこで「漁撈文化（圏）」を代表する西北九州型結合釣針と石鋸についても既存の研究に依拠しつつ簡単に状況を確認し、そのうえで総合的に「漁撈文化（圏）」の実態を捉えたい。

1. 西北九州型結合釣針

鋸歯尖頭器・石鋸とは異なり、弥生時代に位置づけられる資料が複数遺跡で多数が確認されている。このことから、確実に弥生時代においても用いられた漁撈具であったと考えてよい。一方で縄文時代中期・晩期および弥生時代早期に位置づけられる資料は認められておらず（九州縄文研究会長崎大会事務局編 2009、中尾 2005）、この状況は渡辺誠によって指摘されて以来（渡辺 1985）、約 30 年間変化していない。渡辺は縄文時代後期と弥生時代前期との間の空白については「目下のところ未検出」と表現しており、両時期を繋ぐ資料が将来的に発見されることを期待していたよ

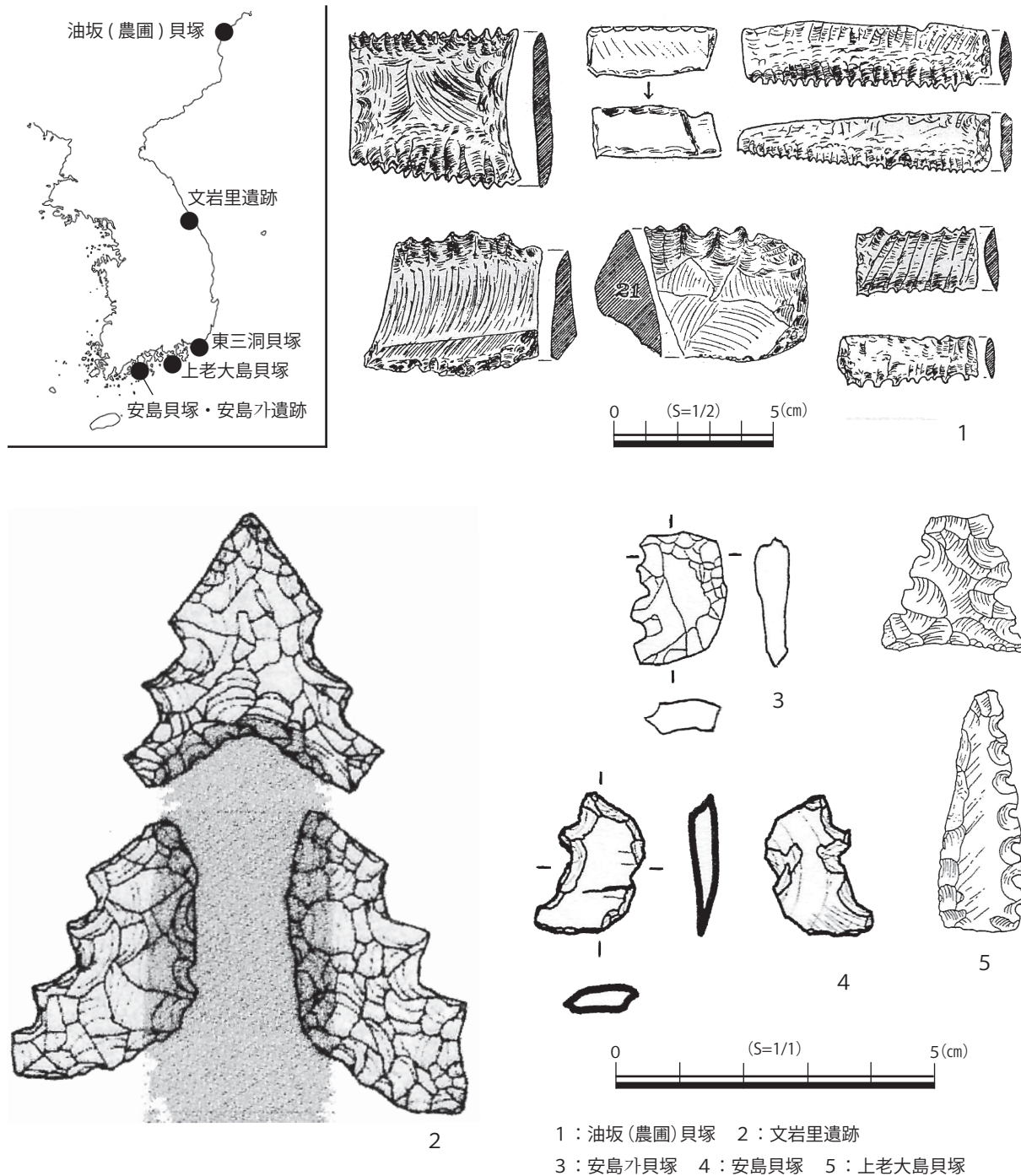


図 20 朝鮮半島の鋸齒尖頭器・石鋸関係資料①

うである。しかし現在に至るまで状況に変わりがない
 という事は、もはやこの期間の資料が未発見・空白
 なのではなく、縄文時代と弥生時代の結合式釣針は系
 統を異にするものであることを示しているのではない
 だろうか。縄文時代晩期—弥生時代早期の存続年数は
 研究者による認識の差はあれ数百年間に及ぶもので
 あり、この期間を隔てて系統を同じくする結合式釣針が
 再現されるとみるのはあまりにも非現実的である⁽⁷⁾。

縄文時代前期と後期の間の空白期間も、やはり両者

を同系統とみる理解を難しくする。前期に位置づけら
 れている資料はすべて菜畑遺跡(佐賀県唐津市)から
 出土したもので、曾畑式に伴うものとされる(中島・
 田島編 1982)。ひとつの遺跡のみから確認される
 という状況は特異である。これらが出土した層である
 「14層」には後期の土器も含めて若干の他時期の遺物
 も検出されており、後期の結合式釣針が混入した可能
 性も推測される(中尾 2009)。

朝鮮半島との関係性については、冒頭でも触れたよ

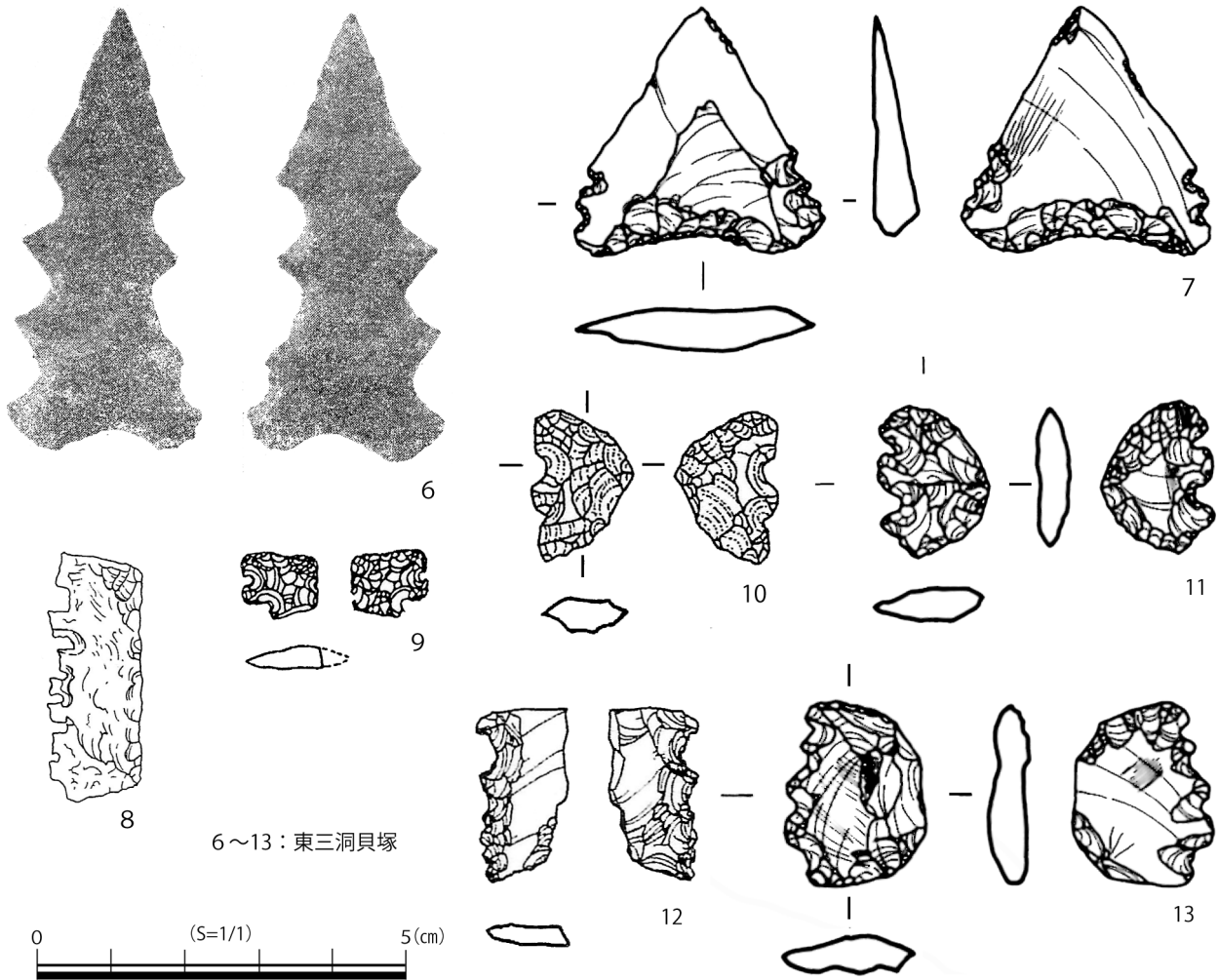


図 21 朝鮮半島の鋸歯尖頭器・石鋸関係資料②

うに、中心となる時期や結合方法の相違が明らかにされている（中尾 2013）。系譜についても、今後は日本列島での内的な成立を仮定して検証されていくことになるであろう（水ノ江 2015）。

2. 石鋸

ここでは鋸歯尖頭器・石鋸以外の石製刺突具全般を石鋸とする。縄文時代早期から晩期まで確認されており（九州縄文研究会長崎大会事務局編 2009）、鋸歯尖頭器・石鋸に比べれば格段に出土数が多い。従来から指摘されているように、器種の認定要素に比較的あいまいな部分があり、「形式の共通理解」を提示することが必要とされている（福田 1999）。これを受けて、つぐめのはな遺跡VI層・VII層出土の石鋸を「つぐめのはな式石鋸」と命名し、縄文時代早期末に地域的・時間的に限定された範囲内でクジラ漁に使用されたものとして位置づける見解が出されている（川道 2007・2013）。時期や地域単位で仔細に分析することで、さ

らにまとまりが抽出できる可能性が示された例である。

朝鮮半島南岸の遺跡でも石鋸と考えられる石器が認められているが、先述のとおり石鋸という器種そのものの認定基準に曖昧な面があるため、九州の石鋸との関係性は明らかではない。また蛇頭形的大型石鋸は朝鮮半島では認められていないことなど⁽⁸⁾、九州内に独自の型式が存在することは重要視すべきだろう。

3. 「漁撈文化（圏）」は認められるか

縄文文化と朝鮮半島新石器文化にまたがる沿岸部に展開していたとされる「漁撈文化」「漁撈文化圏」は、九州と朝鮮半島の両地域の漁撈民が洋上で関係を持つことにより成立したものとして提唱され、両地域に共通性のある漁撈具が認められることがその証拠であるとされてきた。さらに「漁撈文化（圏）」は弥生時代に至っても存続し、水田稲作農耕が日本列島にもたらされる道筋ともなったと理解されてきた。

しかし鋸齒尖頭器と石鋸の分析を通して明らかとなったのは、これらは九州で成立し、九州の沿岸部・島嶼部を中心に展開したものであり、朝鮮半島への波及は限定的であったということである。このような見方は、すでに西北九州型結合釣針や石鋸の分析でも指摘されており、近年の研究動向を跡付ける形となった。もはや共通の漁撈具を携えた人々が、対馬海峡を挟む両地域を頻繁に往来し、密に交流する姿を思い描くことは不可能になりつつあるだろう。

また朝鮮半島との関係性をめぐる問題を切り離れたとしても、各種の漁撈具の動向からは、総体的な「文化」として時間的・地域的な連動が認められるような状況は積極的には見出せない。鋸齒尖頭器・石鋸の場合は唐津湾地域で出現し、そこから類型ごとに分布範囲を異にしながら展開していく。その一方でつぐめのはな遺跡の石鋸のように、ある時期と地域に特定の漁具が集中して使用される状況がある。鋸齒尖頭器・石鋸と西北九州型結合釣針は共伴する遺跡が複数あるため連動性が高い印象を与えるが、結合釣針の出現は時間的にやや後出するし、遺跡数も比較して少ない⁽⁹⁾。これらのことから、「漁撈文化（圏）」という枠組みのもとで総体的な文化現象を認めようとする見方は肯定し難いと結論される。

X. 課題と展望

総体的な「漁撈文化（圏）」の想定が難しいことに加え、それが弥生時代に継承されていないとすれば、漁撈活動による交流関係が水田稲作農耕の道筋となったとする説をも疑問視する結果となる。このことは古澤義久が土器研究に基づいて導いた結論が（古澤2014）、漁撈具の面からも肯定できることを示している。当然ながらこのような見方は弥生時代研究にも少なからず影響を与えることとなる。特に、農耕社会の発展に伴って増加した大陸・朝鮮半島の文物や動物性蛋白質への需要を、縄文時代からの伝統を引く「海村」の人々が輸送者あるいは供給者として支えていたとする説は（下條1989）、本稿での検討結果を踏まえれば再検討の余地がある。

“鋸齒のない石鋸”との解釈もあるサイド・ブレイドとの関係については（荻原・久原1975）、本稿では全く触れることができなかった。漁の対象となった動物種の問題についても今後の重要な検討課題である。また、本稿では欠損部位の傾向を捉えて使用方法等を考察したが、顕微鏡を用いたより精細な使用痕観察により、肉眼ではわからない新たな知見が得られることも期待される。分析の対象や方法を広げながら、

さらなる研究の深化に努めていきたい。

これまでの研究は、先に出来ていた枠組みに個々の事象を当てはめていくという作業によって取り組まれてきた。その結果として成立したのが「漁撈文化（圏）」という概念であったといえよう。昨今の研究は、これまで「漁撈文化（圏）」を構成していた要素を現在の水準で個別に検討することによって、新たな事実を明らかにし始めている。本稿もまた「漁撈文化（圏）」から鋸齒尖頭器・石鋸を解き放って、これらに新たな評価を与えようとした試みであり、ささやかでも新たな研究の流れに寄与することができるならば望外の喜びである。

本稿は2014年度に提出した修士論文の一部に新たな資料と検討を加えて、大幅に書き改めたものである。ご指導を頂きました大貫静夫先生・設楽博己先生・佐藤宏之先生、そして3年間の院生生活を通してお世話になりました研究室の皆様にも厚く御礼を申し上げます。また、資料の実見、文献の収集、遺跡の踏査等に際しては以下の個人・機関のご協力・ご指導を得た。特に、天草市教育委員会からは未報告資料の写真掲載の許可を頂いた。記して感謝申し上げます。（敬称略）

伊藤慎二・河合 修・河野正訓・草場誠司・佐々田学・塩塚浩一・高屋敷飛鳥・田島龍太・中山 圭・仁田城聡・日高武二・古澤義久・本多康二・山下優介・米倉美和子

天草市立五和歴史民俗資料館・天草市立本渡歴史民俗資料館・糸島市立志摩歴史資料館・國學院大學考古学研究室・東京大学考古学研究室・長崎市歴史民俗資料館・平戸市里田原歴史民俗資料館・末盧館

[註]

- 1) 縄文時代前・中期の東日本から北海道にかけての地域で、擦切石斧や玉類の石材の擦切具として用いられていたとされる石器を指している。また、弥生時代に管玉の石材に分割用の溝を施すために用いられていた石器も石鋸と呼ばれている（大塚・戸沢編1996）。
- 2) ただし、この当時は五島列島での限定的・集中的な石鋸の発見が報じられていたので（田淵1931、津田1940）、横山が五島列島を含めた九州方面からの波及を想定したのは当然の発想ではあったと思われる。
- 3) 例えば、耐水性に優れているアスファルトを膠着材として用いた石鏃や、膠着効果を高めるための研磨が装着部に施された「関東型局部磨製石鏃」に、漁撈具としての機能を想定した大工原豊による研究がある（大工原1990）。しかし新町遺跡や徳蔵谷遺跡の鋸齒鏃にはそのような特徴は認められない。
- 4) 刃部に鋸齒が施されている場合には、ここにも抵抗機能を想定できなくもない。しかし距（脚部）に比べればわずかな凹凸を

造りだしているにすぎず、十分な効果を持ち合わせているとは考え難い。従来の一般的な解釈のとおり、傷の拡大を目的とした工夫として捉えるのが適当であろう。

- 5) 東日本に多く見られるが、九州でも北松尾口遺跡(福岡県小郡市)で弥生時代の竪穴住居跡から複数点が出土している(速水・相原編 1990)。
- 6) なお、文岩里遺跡出土の鋸歯尖頭器・石鋸についてはさらなる検討を要する【図 20-2】。新石器時代前期の層から出土したものであるとすれば(朴珮貞 2003)、九州の鋸歯尖頭器・石鋸よりも先行する可能性が高い。しかし遺跡の所在地は朝鮮半島東海岸のほぼ中央であり、南海岸や九州との地理的な隔りがある。鋸歯の形状は東三洞貝塚の棘状の鋸歯を持つ資料に近いが、両者に系統的な繋がりが存在するのかは明らかではない。今後改めて検討すべき課題としたい。
- 7) このように考えると、弥生時代の結合式釣針までも「西北九州型」とすることはもちろんのこと、九州以東に出現した弥生時代の結合式釣針を九州からの拡散として解釈することにも注意が必要となってくる。同時期の朝鮮半島の結合式釣針との比較も踏まえつつ、新たに系統関係を整理していく必要があるのではないだろうか。
- 8) 九州縄文研究会第 19 回長崎大会の討論での廣瀬雄一の発言による。またこの時、鋸歯尖頭器について鋸歯鏃からの発展を想定している旨を述べていることも合わせて記しておきたい(第 19 回九州縄文研究会長崎大会事務局 2010)。
- 9) 中尾篤志の集成によれば、縄文時代後期に位置づけられる西北九州型結合式釣針が出土した遺跡は 16 か所である(中尾 2005)。うち 11 遺跡で鋸歯尖頭器・石鋸が出土している。

[引用文献]

明石拓子編 2002 『下谷遺跡』松浦市文化財調査報告書 18
 明瀬慎吾編 1989 『赤松海岸遺跡』鎮西町文化財調査報告書 7
 麻生 優編 1969 『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
 荒木伸也編 2000 『雪浦清水遺跡』大瀬戸町文化財調査報告書 2
 有光教一 1968 「雑穀と米：半島と島国」『シンポジウム日本農耕文化の起源』角川新書, 87-114
 安楽 勉編 1980 『白浜遺跡』福江市文化財調査報告書 2
 安楽 勉編 1992 『福江・堂崎遺跡』福江市文化財調査報告書 5
 安楽 勉・藤田和裕 1979 「浜泊遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ』長崎県文化財調査報告書 45: 45-84
 安楽 勉・藤田和裕編 1985 『名切遺跡』長崎県文化財調査報告書 71
 諫見富士郎編 2001 『大野原遺跡』有明町文化財調査報告書 12
 石原正敏 1996 「アメリカ式石鏃再考」『考古学と遺跡の保護：甘粕健先生退官記念論集』甘粕健先生退官記念論集刊行会, 179-197
 伊藤慎二 2011 『琉球文化圏の北限に関する考古学的基礎研究』2010 年度國學院大學特別推進研究(國特推助第 40 号) 成果報告
 岩尾峯希編 2003 『徳蔵谷遺跡(4)』唐津市文化財調査報告書 110
 岩尾峯希編 2004 『徳蔵谷遺跡(5)』唐津市文化財調査報告書 117
 及川民次郎 1933 「南朝鮮牧ノ島東三洞貝塚」『考古學』4(5): 139-148
 大谷有恵編 2008 『魚洗川 B 遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書

199
 大塚初重・戸沢充則編 1996 「石鋸」『最新日本考古学用語辞典』柏書房, 19
 荻原博文・久原卷二 1975 「九州西北部の石鋸、サイド・ブレードについて」『古代文化』27(4): 50-60
 乙益重隆・前川威洋 1969 「縄文後期文化 九州」『新版考古学講座 3』雄山閣, 269-289
 小野ゆかり・宮崎貴夫編 1989 『国崎遺跡』南串山町文化財調査報告書 2
 賀川光男編 1971 『宮下遺跡』長崎県文化財調査報告書 9
 川口洋平編 1994 「白浜貝塚」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ』長崎県文化財調査報告書 114
 河村裕一郎編 1992 『新町遺跡Ⅴ』志摩町文化財調査報告書 16
 川道 寛 2007 「つぐめのはな遺跡のクジラ漁」『縄文時代の考古学 5: なりわい—食糧生産の技術—』同成社, 163-169
 川道 寛 2013 「石鏃と鋸歯尖頭器の二者：縄文時代石製漁撈具の諸相」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』3: 1-10
 川道 寛編 1998 『宮下貝塚』富江町文化財調査報告書 1
 川道 寛・塩塚浩一 1997 「中島遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書 133: 5-56
 木村幾多郎 1987 「北部九州の漁撈活動」『文明のクロスロード Museum Kyusyu』7(1): 9-18
 木村幾多郎 2003 「縄文時代の日韓交流」『東アジアと日本の考古学Ⅲ』同成社, 29-56
 九州縄文研究会長崎大会事務局編 2009 『九州における縄文時代の漁撈具：発表要旨・資料集』第 19 回九州縄文研究会長崎大会
 桑山龍進 1951 「五島の石鋸について」『日本考古学協会第八回総会研究発表要旨』日本考古学協会, 10-11
 甲元眞之 1987 「先史時代の対外交流」『日本の社会史 1: 列島内外の交通と国家』岩波書店, 15-54
 甲元眞之 1990 「大陸文化と玄界灘：考古学からみた対外交流」『海と列島文化 3: 玄界灘の島々』小学館, 45-67
 甲元眞之 2001 「日韓交流関係遺物出土遺跡地名表 附：遺跡分布図・遺物実測図」『シンポジウム海峡を越えて：原の辻以前の先史時代の人と交流』龍田考古学会, 39-76
 甲元眞之・鄭 澄元・河 仁秀・小畑弘己・正林 護・田中聡一・高野晋司 2002 「先史時代の日韓交流試論：九州出土韓国系遺物及び韓国出土縄文系遺物の基礎的研究」『青丘學術論集』20: 5-104
 坂田邦洋 1976 『対馬の考古学』縄文文化研究会
 坂田邦洋 1978 『韓国隆起文土器の研究』昭和堂印刷出版事業部
 坂田邦洋 1988 「西九州・対馬・韓半島西南」『考古学ジャーナル』295: 17-21
 坂本和也 1995 「アメリカ式石鏃考」『みちのく発掘：菅原文也先生還暦記念論集』菅原文也先生還暦記念論集刊行会, 211-235
 坂本経堯・坂本経昌 1971 『天草の古代』坂本経堯
 佐原 真 1968 「日本農耕起源論批判：『日本農耕文化の起源』をめぐって」『考古学ジャーナル』23: 2-11・20
 下條信行 1989 「弥生時代の玄界灘海人の動向：海村の出現と役割」『生産と流通の考古学：横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ』横山浩一先生退官記念事業会, 107-123
 正林 護編 1976 『里田原遺跡』長崎県文化財調査報告書 25
 正林 護編 1989 『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書 9

- 正林 護・村川逸朗編 1986 『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅸ』長崎県文化財調査報告書 82
- 新東晃一・児玉健一郎編 1993 『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』
- 杉山壽榮男 1928 『日本原始工藝概説』工藝美術研究会
- 芹沢長介 1965 「周辺文化との関連」『日本の考古学Ⅱ：縄文時代』河出書房新社, 418-442
- 芹沢長介 1968 「農具と農耕」『シンポジウム日本農耕文化の起源』角川新書, 15-37
- 第19回九州縄文研究会長崎大会事務局 2010 「第19回長崎大会の記録」『九州の縄文時代中期土器を考える：発表要旨・資料集』第20回九州縄文研究会佐賀大会, 472-481
- 大工原豊 1990 「縄文時代後・晩期における局部磨製石鋸の展開と意義：縄文時代における石器研究の一試論」『青山考古』8：39-57
- 高木正文・村崎孝宏編 1998 『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告書 166
- 高野晋司編 1987 「前目遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅹ』長崎県文化財調査報告書 86：1-48
- 高橋 健 2001 「続縄文時代前半期の銚頭の研究」『東京大学考古学研究室研究紀要』16：83-137
- 高橋 健 2008 『日本列島における銚頭の考古学的研究』北海道出版企画センター
- 田島龍太 1994 「石器について」『徳蔵谷遺跡(2)』唐津市文化財調査報告書 63：83-86
- 田島龍太 1995 「石器について」『徳蔵谷遺跡(2)』唐津市文化財調査報告書 68：96-97
- 田島龍太編 1994 『徳蔵谷遺跡(1)』唐津市文化財調査報告書 57
- 田島龍太編 1995 『徳蔵谷遺跡(2)』唐津市文化財調査報告書 63
- 田島龍太編 1996 『徳蔵谷遺跡(3)』唐津市文化財調査報告書 68
- 橋 昌信 1979 「石鋸：西北九州における縄文時代の石器研究二」『史学論叢』10：81-164
- 立石 明・田中 学・宮下雅史・桜庭由美・土岐耕司編 2004 『深堀遺跡』長崎市教育委員会
- 田中聡一編 2003 『松崎遺跡』勝本町文化財調査報告書 11
- 田淵榮藏 1931 「先史時代の長崎縣」『長崎談叢』9：1-14
- 塚原 博編 2003 『野首遺跡』小値賀町文化財調査報告書 17
- 対馬遺跡調査会 1963 「長崎県対馬調査報告(二)」『考古学雑誌』49(2), 63-69
- 津田繁二 1940 「我が長崎縣の先史時代及び原史時代の遺跡遺物の概畧に就て」『長崎談叢』26：1-41
- 東京国立博物館編 1979 『収蔵品目録：先史・原史・有史』東京国立博物館
- 富田紘一・松舟博満編 1989 『椎ノ木崎遺跡試掘調査報告書』牛深市教育委員会
- 土井良浩・堀 繁 1996 「地形に保護されて立地している漁村の地形構造に関する研究」『1996年度第31回日本都市計画学会学術計画論文集』：235-240
- 内藤芳篤編 1967 『深堀遺跡』人類学考古学研究報告 1
- 中尾篤志 2005 「弥生時代における結合式釣針の拡散と展開：原の辻遺跡出土資料の位置づけをめぐって」『考古論集：川越哲志先生退官記念論文集』川越哲志先生退官記念事業会, 245 - 262
- 中尾篤志 2009 「西北九州地域における漁撈具の動向」『九州における縄文時代の漁撈具：発表要旨・資料集』第19回九州縄文研究会長崎大会, 6-16
- 中尾篤志 2013 「結合式釣針」『季刊考古学』125：55-58
- 中田敦之・高原 愛編 1997 『田川遺跡』松浦市文化財調査報告書 12
- 長野真一編 1992 『江内貝塚』高尾野町埋蔵文化財発掘調査報告書 2
- 中村修身 1971 「石鋸の紹介」『古代文化』23(7)：161-162
- 秀島貞康編 1984 『有喜貝塚』諫早市文化財調査報告書 5
- 久村貞男編 1980 『宮の本遺跡』佐世保市文化財調査報告書
- 平野敏和編 1982 『出津遺跡』外海町文化財調査報告書 1
- 副島和明編 2006 『門前遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書 190
- 福田一志編 1986 『殿崎遺跡』長崎県文化財調査報告書 83
- 福田一志編 2002 『千里ヶ浜遺跡』長崎県文化財調査報告書 168
- 福田一志 1999 「西北九州における縄文後期遺跡の特性：土器分析・石器を中心として」『西海考古』1：35-50
- 藤田 等・中川忠美編 1981 『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書 1
- 藤本貴仁編 2008 『轟貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書 30
- 古門雅高編 1996 『頭ヶ島白浜遺跡』有川町文化財調査報告書 1
- 古澤義久 2014 「玄界灘島嶼域を中心にみた縄文時代日韓土器文化交流の性格：弥生時代早期との比較」『東京大学考古学研究室研究紀要』28：27-80
- 前川威洋編 1974 『天神山貝塚』志摩町文化財調査報告書 1
- 松岡 史・森醇一郎 1982 「海底遺跡」『未慮國』六興出版, 53-62
- 松本健郎 2006 「浜ノ洲貝塚」『栖本町史』栖本町, 32-52
- 水ノ江和同 2003 「朝鮮海峡を越えた縄文時代の交流の意義：言葉と文化圏」『考古学に学ぶ(Ⅱ)：考古学研究室開設五十周年記念』同志社大学考古学シリーズ8, 同志社大学考古学シリーズ刊行会, 55-66
- 水ノ江和同 2007 「ふたたび、対馬海峡西水道を越えた縄文時代の交流の意義：縄文文化と異文化との接触、言葉と文化圏」『考古学に学ぶ(Ⅲ)：森浩一先生傘寿記念献呈論集』：同志社大学考古学シリーズ9, 同志社大学考古学シリーズ刊行会, 73-84
- 水ノ江和同 2012 『九州縄文文化の研究：九州からみた縄文文化の枠組み』雄山閣
- 水ノ江和同 2015 「結合式釣針の系譜」『森浩一先生に学ぶ：森浩一先生追悼論集』同志社大学考古学シリーズ11, 同志社大学考古学シリーズ刊行会, 83-93
- 水ノ江和同・西脇対名夫編 2013 『季刊考古学』125
- 御堂島正 1991 「石鋸と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』92：79-97
- 御堂島正 2005 『石器使用痕の研究』同成社
- 宮崎貴夫編 1991 『宮ノ首遺跡』宇久町文化財調査報告書 2
- 宮下雅史編 2002 『磨屋町遺跡』長崎市教育委員会
- 宮本一夫 1989 「海峡を挟む二つの地域：山東半島と遼東半島、朝鮮半島南部と西北九州、その地域性と伝播問題」『考古学研究』37(2)：29-48
- 宮本一夫編 2000 『福岡県岐志元村遺跡』考古学資料集 15, 国立歴史民俗博物館春成研究室
- 村川逸朗編 1987 『中島遺跡』福江市文化財調査報告書 3
- 村川逸朗編 1989 「三代遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅻ』長崎県文化財調査報告書 94：41-79

山崎純男 1972 「天草地方始原文化の一側面：本渡市大矢遺跡出土の石器類を中心に」『熊本史学』40：30-45

山崎純男 1988 「西北九州漁撈文化の特性：石製鈎頭（石鈎）を中心に」『季刊考古学』25：59-65

山崎純男 1995 「北部九州：高度な技術体系の伝播」『弥生文化の成立：大変革の主体は「縄紋人」だった』角川選書 265, 118-130,

山崎純男 2002 「人類の誕生」『五和町史』五和町：112-200

山崎純男編 2000 『一尾貝塚』五和町史資料編 11

山崎純男編 2007 『大矢遺跡』天草市文化財調査報告書 1

横山 順・田中良之 1979 「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」『九州考古学』54：1-21

横山將三郎 1933 「釜山府絶影島東三洞貝塚報告：縄紋式系統の朝鮮大陸との関係」『史前学雑誌』5(4)：1-49

横山巴貴子編 1980 『ケイマンゴ-遺跡』長崎県文化財調査報告書 52

渡邊 仁 1954 「対馬に於ける黒曜石工業：石器工作活動に関する若干の資料」『對馬の自然と文化』総合研究報告 2：310-317, 古今書院

渡邊 誠 1968 「九州地方における抜歯風習」『手塚山考古学』1：1-7

渡邊 誠 1985 「西北九州の縄文時代漁撈文化」『列島の文化史』2：45-96

渡邊 誠 1988 「縄文・弥生時代の漁業」『季刊考古学』25：14-20

河仁秀 2007 『東三洞貝塚 浄化地域 発掘調査 報告書』釜山博物館発掘研究調査 24

朴瑜貞 2003 「02 高城文岩里 先史遺蹟 発掘調査」『日韓新石器時代の石器：発表要旨集』第 5 回日韓新石器時代研究会, 13-30

孫宝基 1982 『上老大島の 先史時代 살림살이』수서원

鄭澄元・河仁秀 1998 「南海岸地方과 九州地方의 新石器時代 文化交流 研究」『韓國民族文化』12（水ノ江和同訳 2001 「南海岸地方と九州地方の新石器時代文化交流研究」『古文化談叢』47：111-169）

趙現鐘・申相孝・殷和秀 1994 「麗川郡島嶼 地表調査 報告」『突山 世救地 遺蹟』國立光州博物館學術叢書 27：67-222

趙現鐘・梁成赫・尹温植 2009 『安島貝塚』國立光州博物館學術叢書 58

尹武炳・任鶴鐘・呉世筵 2004 『東三洞貝塚Ⅱ』國立博物館古蹟調査報告 34

尹武炳・任鶴鐘・呉世筵 2005 『東三洞貝塚Ⅰ』國立博物館古蹟

調査報告 34

金建洙 1997 『韓半島における原始・古代の漁撈文化』名古屋大学文学研究科博士論文

李相均 2013 「新石器時代における韓半島南海岸と日本九州との文物交流：安島貝塚を中心として」『考古学雑誌』98(2)：54-77

[挿図出典]

図1 渡邊1988

図2 筆者作製

図3 河村編1992, 田島編1993; 1994, 前川編1974を一部改変

図4 岩尾2004, 荻原・久原1975, 川道・塩塚1997, 正林編1989, 田島編1994, 立石ほか編2004を一部改変

図5 明石編2002, 明瀬編1989, 荻原・久原1975, 塚原編2003を一部改変

図6 山崎2002および筆者撮影の写真

図7 正林編1976, 新東・児玉編1993, 内藤編1967, 山崎編2007および筆者撮影の写真

図8 安楽・藤田1979, 賀川編1971, 副島編2006, 宮崎編1991を一部改変

図9 富田・松舟編1989, 福田編1986, 山崎編2007を一部改変

図10 高木・村崎編1998, 塚原編2003および筆者撮影の写真

図11 安楽・藤田編1985, 諫見編2001, 大谷編2008, 正林・村川編1986, 富田・松舟編1989, 藤田・中川編1981, 古門編1996, 山崎2002を一部改変

図12 坂田1978

図13 正林編1976, 福田編2002

図14 筆者作成

図15 高橋2008を改変

図16 田島編1996, 中尾編2009を改編

図17 岩尾編2004を改編

図18 筆者作製

図19 岩尾編2004, 中尾2009

図20 甲元ほか2002, 中尾2009, 横山1933, 趙現鐘ほか1994;2009を一部改変

図21 横山1933, 河仁秀2007, 尹武炳ほか2004;2005, を一部改変

表1 筆者作成

表2 筆者作成

表3 御堂島2005を改変

表4 筆者作製

The genealogy and development of saw-formed edge point and blade

Keita KUGAYA

Saw-formed edge point and blade are stone implement that it was probably used as a harpoon by combining both. These are recognized in Jomon culture in Kyushu and Korean Peninsula neolith culture characteristically. In the past study, the genealogy of saw-formed edge point and blade in Kyushu has been thought in Korean Peninsula. And this view was considered to be one of evidence that there was “fishing culture” to be common in both areas at that time.

In this paper, sort out these four types (and the others), arranged time and distribution of each type. Of four types, “Tokuzotani type” point tend to be excavated with a large quantity of saw-formed edge flint arrowhead. About half of these arrowheads ware damaged barb, it is thought that the reason is these were used as harpoon. When I suppose that saw-formed edge point and blade is saw-formed edge arrowhead which upsized, it is thought that saw-formed edge blade corresponds to barb of saw-formed edge arrowhead. For these reason, it is assumed that saw-formed edge blade was developed for the purpose of improve efficiency of parts replacement by separating barb damaged easily from head part.

It is thought that other three types diverged from “Tokuzotani type”. Saw-formed edge blade which is accepted in Korean Peninsula is “Shitadani type” and “Monzen type”. The existence of “Tokuzotani type” is not recognizable. The number of individual and the remains which there were excavated is overwhelmingly less than in Kyushu. There were brought fragmentarily from Kyushu, did not take root in Korean Peninsula. This result of analysis brings doubt in a frame of “fishing culture”.